

平成 23 年度学位論文

中・日における教師志望学生が持つ体育授業に関する意識の比較

教科教育専攻 保健体育専修

保健体育科教育

10G P217 高 娃

指導教員 清 水 紀 人

—目 次—

I. はじめに	1
II. 第二次世界大戦終戦以降の中・日学校体育目標の変遷	1
III. 調査研究を行うにあたって	4
IV. 方 法	5
V. 結果と考察	6
VII. まとめ	33

引用・参考文献

謝 辞

付 録

I. はじめに

中国は1993年（平成5年）に「中華人民共和国教師法」¹⁾が公布された。その中で「国家は教師資格制度を実施する」と規定し、各段階の教師資格を取得するために必要な要件について決定した。そして、中華人民共和国教師法の第11条の第2項で、「小学校教師資格を取得するためには、中等師範学校卒業あるいはそれと同等以上の学歴を持たなくてはならない」さらに同条では、「本法に規定する教師資格の学歴を持たない公民は、教師資格の取得を申請して、国家教師試験に合格しなければならない」と規定した。また、同法では、研修を通じて職務能力の向上を図ることが法的に求められ、研修は、「研修に参加することは教員の義務である（第7条⑥）」とし、「各レベルの教師進修学校は、小中学校の教員研修の養成と研修の充実に努め、非師範学校も小中学校教員の養成と研修の任務を負わなければならない。（第18条）」とした。しかし、現地教員（教員資格を有しない教員）の現状を見ると、専門的知識や指導技術などが足りないケースが多く、国家教師試験で不合格と評定される教師の存在が多々見られることが明らかになっている。

一方、日本の「教育基本法」平成18年12月の改正によって、教育に関わる様々な法や制度が改正された。その中でも教育職員免許法及び教育公務員特例法の改正は、教職員にとって重要なものの一つといえる。この教育職員免許法及び教育公務員特例法の改正によって、平成19年3月には中央教育審議会答申²⁾「教育基本法の改正を受けて緊急に必要とされる教育制度の改正について」において、「児童・生徒への指導が不適切な教員の人事管理の厳格化」に関する提言がなされた。その後、教育職員免許法の一部改正が平成19年6月に行われ「指導が不適切である」と教育委員会に認定された教諭等に対して、指導改善研修を実施することが義務付けられた。現在の教育現場において、「指導力不足教師」なる存在が社会問題となっている。そのことは、日本の文部科学省が平成12年から16年にかけて行った調査³⁾「指導力不足教員等の人事管理に関する各都県・指定都県市教育委員会の取組状況について」からも理解できることである。

植屋・孫らの研究⁴⁾「指導力不足指導教師」を生み出したいくないと願う大学教育の指導の在り方（2006年11月）の中で、教育現場における指導力不足教師の概念を①授業がきちんとできない。②子どもとうまく接することができない。③教育者としてのモラルに欠ける。④学級経営ができない。⑤指導すべき教材（内容）への知識の欠如。の4点にまとめている。このことから、両国ともに教師の指導方法の開発や学習過程の中で、児童生徒がつまずきやすい事項を分析し、指導方法の充実・改善を図ることの意味やそれらの具体的解決方法を導き出すことは、今日の課題であるとともに急務を要するものと考えられる。また、実際に、日本の学習指導要領にあたる中国の「教材大綱」を見てもその中に書かれている内容は、理論的な提案のみで実践の場において生かされていないケースが多々見受けられる。そして、このことは、中国も日本と同様に、指導力不足や指導が不適切である教師を生み出す大きな要因の一つとなっていることが伺える。

II. 第二次世界大戦終戦以降の中・日学校体育目標の変遷

1. 1950年代の中・日の体育目標

1950年代の中・日の体育目標をみる。中国の体育教育は、全面発達教育の一部分であり、小学校教育の目的は、少年児童を全面発達の新人に養成し、将来の社会主義建設と祖国の防衛の参加準備に貢献する。体育教育は、知育、徳育、美育及び生産技術教育と密接に結んで実現するものとし、その目標を以下の5項目にまとめている（林陶、1999）⁵⁾。

- ① 成長している子どもの身体発達を正常に促し、身体を鍛え、健康を促進する。
- ② 基本体操遊戯などの技能を教え、その技能を日常生活へ応用させ、身体能力（機敏、速度、量力）を増進する。
- ③ 勇気、活発、積極、自主性、友情、助け合い精神を養成する。
- ④ 個人の衛生と公共衛生の習慣を養成する。
- ⑤ 子どもの体操、遊戯に対する愛好と自発的に運動する習慣を養成する。

これに対し、日本は、体育目標（昭和33年改訂版）を以下の4項目にまとめている（日本学校体育研究）⁶⁾。

- ① 各種の運動を適切に行わせることによって基礎的な運動能力を養い、心身の健全な発達を促し、活動を高める。
- ② 運動に親しませ、運動の仕方や技能を身に付け、生活を豊かにする態度を育てる。
- ③ 運動やゲームを通して、公正な態度を育て、進んで約束を守り、お互いに協力して自分の責任を果たすなどの社会生活に必要な態度を養う。
- ④ 健康、安全に留意して運動を行う態度や能力を養い、さらに、保健の初歩的知識を理解させ、健康な生活を営む態度や能力を育てる。

上述した内容を両国間で比較すると中国の場合は、旧ソ連の教育制度を参考にし、ソ連教育理念を基礎として「教え」を重視し「学習」を軽視する傾向にあったため体育目標においては、「身体の鍛錬」に重点が置かれ、特に技能の向上、身体能力の増進に関わる内容に力点が置かれていたことがわかる。

一方、日本は敗戦後、アメリカの指導を受け、体育の独自性が追求され始め、新しい体育、新しい生活がスタートすることとなった。そのことによって、体育目標の中核として、「生活を豊かにする態度」、「社会生活に必要な態度」、「健康な生活を営む態度」が強調され、戦前・戦中にはみられなかった新しい考え方が示されることとなった（高橋 1997）。

2. 1960年代の中・日間の体育目標

1960年代の中・日の体育目標をみる。中国は、子どもの体力を増大し、共産主義教育を与え、祖国の防衛と生産労働へ参加ができる人材を養成するものであるとし、その目標を以下の3項目にまとめている（林陶、1999）⁷⁾。

- ① 身体の正常な発達を促進し、自然環境の変化への適応能力を強め、健康を増進する。
- ② 日常生活と労働に需要される基礎活動能力と基礎運動要因の発達を促進する。
- ③ 体育を通して共産党、祖国、労働を愛する教育を行い、勇敢、根性、活発、集団へ服従、規律の遵守、集団主義精神などの共産主義性格を養成する。

これに対して、日本は（昭和43年改訂版）、を以下の4項目にまとめている（日本学校体育研究）⁸⁾。

- ① 運動を適切に行わせることによって、強健な身体を育成し、体力の向上を図る。
- ② 運動のしかたや技能を習得させ、運動に親しむ習慣を育て、生活を健全に明るくする態度を養う。
- ③ 運動やゲームを通じて、情緒を安定させ、公正な態度を育成し、進んできまりを守り、互いに協力して自己の責任を果たすなどの社会生活に必要な能力と態度を養う。
- ④ 健康、安全に留意して運動を行う能力と態度を養い、さらに、健康の保持推進についての初歩知識を習得させ、健全で安全な生活を営むために必要な能力と態度を養う。

上述した内容を両国間で比較すると中国の場合は、大綱(1961年)では、と生産労働の関連及び「体力づくり」の重要性が最強調され、「体育大躍進運動」によって、大運動量（訓練的・体錬的運動内容と運動量を指す）の強調、高度な運動競技レベルの重視、体育と労働・軍事の結合の理論と実践の定着を伺うことができると同時に、体育を通して共産党としての自覚を目覚めさせ、祖国を愛する教育と集団へ服従、規律の遵守、集団主義精神などの共産主義的性格を強めることとなった。

さらに、中国はその後、文化大革命（1966年～1976年）によって教育や体育もまったく暗黒の時代を向かえることとなる。体育の目標、である「労働」を軍事訓練として極端に推進し、「体育課」の名称は「軍体課」に変わり、軍事訓練（体育における労働を指す）として子どもたちを駆りたてた。さらに、知識人と文化人が批判の対象になり、小・中学校の有能な多くの教師が転職せざるを得ない状況となった。このように中国の学校体育の目標は、文化大革命によって大きな影響と変化を生じることとなる（溝口、1978）。

これに対して、日本の場合は、1964年（昭和39年）の東京オリンピックの成功によるスポーツへの関心の高まりとともに「体力づくり」に注目が向けられた。さらに、1968年の指導要領改訂には、「運動を適切に行わせることによって、強健な身体を育成し体力の向上を図る」に見られる基礎的運動能力の育成や体力づくりが目標として強調された。これらの目標を達成するために、「発展的・系統的な指導」を「能率的」、「効果的」に行うことが求められた（丹下、1965）。

3. 1970年代の中・日間の体育目標

1970年代の日・中間の体育目標をみる。中国は、有効的に児童の体力の増強し、子どもを学校体育の

要求に適応でき、未来の革命闘争における祖国建設と祖国の国防の任務を完成できる人材に養成するとし、その目標を以下の3項目にまとめている（林陶、1999）⁹⁾。

- ① 少年児童の年齢特徴に従い、計画的組織的に彼らの体を鍛え、発育と身体機能の発達を促進する。
正しい姿勢、基礎運動要因、活動力、適応力を高め、体力を増加する。
- ② 簡単な体育知識、技能、技術を学習させ、合理的に自分の体を鍛えるように教育する。
- ③ 子どもに共産党と社会主義祖国を愛する精神、鍛錬の自覚性習慣、服従、規律の遵守、活発、勇敢、根性、勤勉などを養成する。

これに対して、日本（昭和52年改訂版）は、それまでの項目ごとに記されていた詳細な目標は簡略化され、「適切な運動の経験を通して運動に親しませるとともに、身近な生活における健康、安全について理解させ、健康の増進及び体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」という一文に集約されることとなった（日本学校体育研究）¹⁰⁾。

上述した内容を両国間で比較すると中国の場合は、中国では、1956年の大綱公布以来、文化大革命終結（1966年～1976年の間に、中国の10年間にわたったプロレタリア文化大革命は終結したが、しかし、中国のあらゆる領域に大きな損失をもたらした。1978年から「開放」「改革」の新路線の下に政治・経済・教育の改革が全面的推進されはじめた。）までの約20年の年月を経てようやく「体育大綱」が改訂されることとなった。しかし、1978年の大綱は、まだまだ文化改革の影響が強く残り、体育内容の抽象化などの問題があったものの「体力づくり」が強調されるとともに科学的な自己鍛錬の意識養成を中心とする「自己教育力」の強調などの変化がみられ、特に、競技スポーツの振興と関わる運動技能の重視が特徴的といえる（羅、1984）。

これに対し、日本は、それまでにみられなかった「楽しい体育」という言葉が登場し、児童生徒に運動の楽しさを味あわせる必要があることを強調し、授業展開上重要な意味を持つこととなった。また、このことによって体育的活動が単に健康の保持・保持増進や体力の向上といった機能的特性的を重視したもものから生涯スポーツを念頭に置いた具体的施策として生涯にわたり体を動かすことその物の楽しさを身に付けさせようとする新たな方向性がみられることとなった（竹田ら1997）。

4. 1980年代の中・日間の体育目標

1980年代の日・中間の体育目標をみる。中国は、子どもの健康と体力を増進し、彼らの徳育、知育、美育、諸方面の伸び伸びした発達を促進し、全民族の素質向上の基盤を築くとし、その目標を以下の3項目にまとめている。

- ① 子どもの身体を全面的に鍛える中で、身体の正常な発育発達を促進し、正確な身体姿勢を形成するとともに子どもの身体機能、身体素質と基本活動能力の全面発展を図る。
- ② 初歩的な体育の基礎的知識・技能・技術を身に付けさせる。
*子どもに次第に学校体育目的と目標を理解させる。
- ③ 子どもに思想道德教育を与える。子どもに共産党、社会主義祖国を愛するように教育する。
*子どもの体育へ興味を養成し、身体鍛錬の習慣と主动性を養成する。
*子どもの自分の健康に対する関心及び社会責任感を養成する。
*子どもの個性発展と促進し、組織性、規律性と活発、勇敢、根性、創造する精神を養成する。
*美的情操と文化行為を陶冶する（林陶、1999）¹¹⁾。

これに対し、日本（平成元年改訂版）は、適切な運動の経験と身近な生活における健康・安全についての理解を通して、運動に親しませるとともに健康の増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。とし、体育を単なる教育の一手段として捉えるのではなく教育そのものであることを提唱した（日本学校体育研究）¹²⁾。

上述した内容を両国間で比較すると中国の場合は、従来までの大綱（1987年）に書かれていた、共産党、社会主義祖国を愛する教育思想は継承されるものの「祖国防衛」という文言は姿を消すこととなり、同時に、80年代初頭から日本社会にもみられる「受験競争」や「知識偏重」の傾向が現れはじめ、80年代後半にはその傾向が一層深刻化し、そのことによって子どもの体力低下や運動不足による発育不良や学業負担増などの新たな問題が生じることとなる（趙、2001）。

これに対し、1980年代（平成元年当時）の日本は、小学校期の低学年において、「運動遊び」が重視されるとともに、生涯教育・スポーツの観点から運動の楽しさを味わい主体的に運動に取り組むことで、

体力の向上を図ることをねらいとし、そのために運動や健康への「関心・意欲・態度」や「思考力・判断力」の育成が「運動技術」の向上と同様に重視されるようになった（黒羽、1993）。

5. 1990年代の中・日間の体育目標

1990年代の日・中間の体育目標をみる。中国は、前改定期の目的に関しては全く変わることなく、目標についても「外界環境に対する適応能力を養成する。」という文言が加筆された以外に改正はみられない。しかし、80年代初頭から現れ始めた「受験競争」や「知識偏重」の傾向は、80年代後半に深刻化は増し、その傾向は90年代に入っても深まるばかりとなり、それらに関わる研究が進められ、1993年には、知・徳・体の全面的な「素質教育（資質教育）」が改めて提唱されることとなった（毛振明、1992）¹³⁾。

これに対し、日本（平成10年改訂版）は、心と体を一体としてとらえ適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。といういわゆる「生きる力を育む体育」が誕生することとなり、系統性を持った個に応じた個別学習形態を重視した学習指導法が推奨されるようになる（日本学校体育研究）¹⁴⁾。

6. 2000年以降～現在の中・日間の体育目標

2000年以降～現在までの中・日間の体育目標をみる。中国は、体育の教育目的を子どもの体格・体力を向上させ、心身の健康増進を図るとともに、自らがそれを実践する力を身に付けさせるとともに生涯体育・スポーツの知識を身に付けるとし、その目標を以下の5項目にまとめている（中華人民共和国教育部、2001）¹⁵⁾。

- ① 体の能力を高め、基本的な体育と健康の知識と運動技能をマスターし応用する。
- ② 運動への興味や好みを養うとともに身体トレーニングをする習慣を形成する。
- ③ 良好な精神を持ち、他人とのコミュニケーション能力と強調精神を表現できるようにする。
- ④ 個人の健康と集団の健康に対する責任感を高め、健康的な生活習慣を養う。
- ⑤ 体育の精神を発揮し、進取な気性と明朗快活な態度を形成する。

*運動への参加、運動技能、身体の健康、精神の健康、社会的適応。

そして、2003年に改定された中国大綱の最新版では、生涯体育・スポーツの観点が強く現れ、児童・生徒の生涯体育・スポーツに関する関心や興味と、他人とのコミュニケーション能力の育成や健康第一を重視し、児童・生徒自ら主体的に学ばせるような方策を提言していることがわかる。

一方、日本は、平成10年と平成20年の二度にわたり学習指導要領の改訂がなされる中、教育基本法そのものも2006年12月に数十年ぶりに大改正されたことは記憶に新しい。

この間の学校体育の基本方針は、生涯にわたって健康の保持増進、豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図るとし、その際、心と体をより一体としてとらえ、健全な成長を促すことが重要であることから、保健と体育を関連させて指導すること（朝日新聞朝刊、2007）¹⁶⁾。また、体育授業についての具体的内容を明記し、体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること。さらに、基礎的な身体能力や知識を身に付け、運動に親しむことができるように、発達段階のまとまりを考慮し、指導内容を整理・体系化して指導するように改善・修正を行っている。

Ⅲ. 調査研究を行うにあたって

現在の中国の学校体育は、歴史的視座からみると大きく転換し、変貌を遂げたことが伺える。そして、受験勉強、知識偏重、子どもたちの体力低下、指導能力不足教師などが今日的課題として問題視されている。

さらに、はじめにでも述べたように中国は1993年（平成5年）に「中華人民共和国教師法」において、研修を通じて職務能力の向上を図ることが法的に求められ、研修は、「研修に参加することは教員の義務である……中略……教師進修学校は、小中学校の教員研修の養成と研修の充実に努め、非師範学校も小中学校教員の養成と研修の任務を負わなければならない。（第18条）」としているにも関わらず、

教師の多くが教師として着任以降、自己研鑽のための自己努力や教授力向上のための教育内容や指導方法の検討も行われていない状況にあり、筆者が中国内モンゴル自治区の中学校で2か月に渡り経験した教育実習の実際を振り返ると体育授業は単なる走る、投げる、ボールを使った遊びの繰り返しが主流であったことも事実である。

また、実際に、日本の学習指導要領にあたる中国の「教材大綱」をみてもその中に書かれている内容は、理論的な提案のみで実践の場において生かされていないケースが多々見受けられる。そして、このことも指導力不足や指導が不適切である教師を生み出す大きな要因の一つとなっているといえるのではないだろうか。

よって学習過程の中で、児童生徒がつまずきやすい事項を分析し、指導方法の充実・改善を図ることの意味やそれらの具体的解決方法を導き出すことは、今日的課題であるとともに急務を要するものと考ええる。

以上のことから、本研究は、上述した「はじめに」ならびに「中・日学校体育目標の変遷」を踏まえ、教師を志望する中・日両国の大学生の現在の体育授業に関しての体験や考え方を聞くことにより、体育授業の実態を把握し、両国間の体育授業を比較することで、どのような点が異なっているかをアンケート調査し、体育授業に関する意識の違いを明らかにすることとした。

IV. 方法

1. 調査対象

中国：中国C師範大学教育学部学生2～4年生：男子200名 女子180名 計380名
日本：H大学教育学部学生2～4年生：男子80名 女子86名 計166名

2. 調査時期： 中国は平成22年10月1日～11月30日
日本は平成23年6月1日～7月30日

3. 調査方法

中・日両国質問紙配布によるアンケート調査を実施した。
中国：回収部数は350部 有効回答率は97.4%(341部)
日本：回収部数は163部 有効回答率は97.5%(159部)

4. 統計処理

単純集計後にクロス集計を行い、 χ^2 乗検定による有意差の検証を行った。

5. 研究仮説

- 両国の社会制度と経済発展の相違によって、学校体育の位置づけの基盤が異なることから、体育授業の捉えかたが異なり、男女間にも相違がある。
- 現在の中国体育教育は歴史から見ると大きく転換したが、そのことが日本の体育授業のように反映されていない。
- 中国の教師たちに知識の更新は見られず、教育内容や方法も改善される事なく行われている現状から中国学生は、日本学生に比べ児童の技能・技術の良し悪しに対する理解度は低い。

V. 結果と考察

1. 校種別にみた体育実技授業に対する意識について

(1) 小学校について

中・日両国間における小学校時の体育実技時間を学生はどんな時間として捉えているのかについて「気分転換」、「体をおもいっきり動かせる」、「新しいこと・技術を学ぶ」、「面倒くさい」、「疲れる」、「その他」の6項目から選択させた結果の内訳を表1-1に示した。

表1-1-1. 体育実技授業に対する意識 (男女全体)

小学校の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	109	32%	25	16%
体をおもいっきり動かせる	92	27%	93	58%
新しいこと・技術を学ぶ	52	15%	18	11%
面倒くさい	19	6%	9	6%
疲れる	28	8%	5	3%
その他	41	12%	9	6%
合 計	341	100%	159	100%

その結果、「気分転換」の項目では、中国が32%、日本が16%という値を示し、中国は日本と比較しその割合が2倍も高いことがわかる。同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると、日本が58%と全体の6割近くを示しているのに対し、中国は27%とその割合が日本と比較し、31%（2倍を上回る値）も低く「気分転換」とは逆の傾向を示したことがわかる。このことから小学校時における日本人学生の体育授業に対する意識は、体を動かすこと（動かせること）という点が非常に強いと推察することができる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると中国は15%、日本は11%を示し、両国間に大差はみられなかった。よって、両国ともに小学校時においては、体育授業で何かを学ぼうとする意識は、さほど高くないことが推察できる。「面倒くさい」の項目は、両国とも同一の割合を示し、「疲れる」の項目では中国は8%（28名）、日本は3%（5名）と中国が5%ほど高く、母数は少ないものの日本との差がみてとれる一面ではないだろうか。

また、これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連みられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

しかし、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体をおもいっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられなかった。6.708 ($p > 0.05$)

よって、大枠で検証をした場合には、両国学生の小学校体育実技に対する意識は同様な傾向にあるものと推察される。

表1-1-2. 体育実技授業に対する意識 (男子)

小学校の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	49	27%	13	17%
体をおもいっきり動かせる	49	27%	45	59%
新しいこと・技術を学ぶ	33	18%	9	12%
面倒くさい	9	5%	5	6%
疲れる	16	9%	1	1%
その他	24	14%	4	5%
合 計	180	100%	77	100%

男子について比較した結果、「気分転換」の項目では、中国が27%、日本が17%を示し、日本と比較しその割合が10%ほど高いことがわかる。同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると「気分転換」とは逆に日本が59%と全体の時と同様に6割近い高い値を示し、中国が27%と3割以上もの差があることわかる。このことから小学校時における日本人男子学生の体育授業に対する意識は、体を動かすこと（動かせること）という点が非常に強いと推察することができる。そしてこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の男子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると中国は18%、日本は12%を示し、中国が6%ほど高いものの小学校時における両国男子学生の体育授業に対する学びの意識は、さほど高くないことがわかる。「面倒くさい」の項目は、中国は5%、日本が6%を示し、「疲れる」の項目では中国は9%（16名）、日本は1%（1名）と中国が8%ほど高いことがわかり、母数は少ないものの日本との差がみてとれる一面ではないだろうか。

また、これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国の男子間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体を思いっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国の男子間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明され、大枠で検証をした場合には、両国の男子学生間では小学校体育実技に対する意識に違いがあることがわかる。

表1-1-3. 体育実技授業に対する意識 (女子)

小学校の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	60	37%	12	15%
体をおもいっきり動かせる	43	27%	48	58%
新しいこと・技術を学ぶ	19	12%	9	11%
面倒くさい	10	6%	4	5%
疲れる	12	7%	4	5%
その他	17	11%	5	6%
合 計	161	100%	82	100%

女子について比較した結果、「気分転換」の項目では、中国が37%、日本が15%を示し、日本と比較しその割合が22%も高く、男女間に差があることがわかる。同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると中国は27%、日本が58%を示し、男子の時と同様に、6割近い高い値を示し、3割以上もの差があることわかる。このことから小学校時における日本人女子学生の体育授業に対する意識は、体を動かすこと（動かせること）という点が、男子と同様に非常に強いと推察することができる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると中国は12%、日本は11%を示し、両国間に差はみられず、男子同様、小学校時における体育授業に対する学びの意識は、さほど高くないことがわかる。「面倒くさい」の項目は、中国は6%、日本が5%を「疲れる」の項目では、中国は7%、日本は5%と両項目とも近似した割合を示し、「疲れる」の項目で男子とは若干異なる傾向を示したことがわかる。

また、これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国の女子間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体を思いっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国の女子間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明され、女子も男子学生と同様、小学校体育実技に対する意識に違いがあることがわかる。

(2) 中学校について

中学校の体育授業について小学校時と同様の観点からみる。結果は表1-2に示す通りである。

表1-2-1. 体育実技授業に対する意識 (男女全体)

中学校の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	84	25%	33	21%
体をおもいっきり動かせる	105	31%	61	37%
新しいこと・技術を学ぶ	66	19%	20	13%
面倒くさい	22	6%	28	18%
疲れる	40	12%	12	8%
その他	24	7%	5	3%
合 計	341	100%	159	100%

その結果、両国間の「気分転換」項目では、中国が25%、日本が21%を示し、日本と比較し、その割合が若干高いことがわかる。同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると「気分転換」とは逆に中国が31%、日本は37%を示し、その割合が低いことがわかる。この2項目について χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられなかった。2.257 ($p > 0.05$)

よって、両国学生の中学校体育実技に対する意識のうち「気分転換」と「体をおもいっきり動かせる」との関係については、同様な傾向にあると推察することができ、小学校期とは異なり、校種が変わることにより変容したことがわかる。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると中国は19%、日本は13%を示し、中国の割合が日本と比較し若干高いことがわかる。「面倒くさい」の項目は、中国が6%、日本が18%を示し、日本の割合が中国と比較しその割合が3倍も高く、「疲れる」の項目では中国が12%、日本が5%と中国が7%ほど高いことがわかる。このことから、中国は校種が上がるにつれて面倒くささ以上に疲労感を感じる傾向にあり、これに対し日本は、疲労感以上に面倒くささに対する意識が高くなる傾向にあり、両国間の意識の違いをみることができる。

また、これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

しかし、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体をおもいっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられなかった。5.488 ($p > 0.05$)

よって、大枠で検証をした場合には、小学校時と同じく、両国学生の中学校体育実技に対する意識は同様な傾向にあるものと推察される。

表1-2-2. 体育実技授業に対する意識 (男子)

中学校の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	41	23%	13	17%
体をおもいっきり動かせる	59	33%	38	50%
新しいこと・技術を学ぶ	43	24%	8	10%
面倒くさい	4	2%	8	10%
疲れる	19	10%	7	9%
その他	14	8%	3	4%
合 計	180	100%	77	100%

男子について比較した結果、両国間の「気分転換」項目では、中国が23%、日本が17%となり、両国間に6%の差がみられた。同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると中国が33%、日本が50%となり、中国は日本に比べ、23%も低いことがわかる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行な

った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると中国が24%、日本が10%を示し、中国は日本に比べ、12%も高く、中国における逆に「面倒くさい」の項目は、中国が2%、日本が10%を示し、中国が8%ほど低いことがわかる。「疲れる」の項目は、中国が10%、日本が9%とその割合は近似していることがわかる。

また、これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国の男子間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体を思いっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国男子間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

よって、大枠で検証をした場合には、両国の男子学生間では小学校時と同様に中学校体育実技に対する意識の違いがあることがわかる。

表1-2-3. 体育実技授業に対する意識 (女子)

中学校の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	43	27%	20	24%
体をおもいっきり動かせる	46	29%	23	28%
新しいこと・技術を学ぶ	23	14%	12	15%
面倒くさい	18	11%	20	24%
疲れる	21	13%	5	6%
その他	10	6%	2	3%
合 計	161	100%	82	100%

女子について比較した結果、両国間の「気分転換」項目では、中国が27%、日本が24%となり、日本と比較し、その割合が若干高いものの近似していることわかる。同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると中国が29%、日本が28%となり、両国とも近似した割合を示している。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられなかった。

よって、両国学生の中学校体育実技に対する意識のうち「気分転換」と「体をおもいっきり動かせる」との関係については女子の場合、同様な傾向にあることがわかる。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると中国が14%、日本が15%を示し、その割合は近似していることがわかる。「面倒くさい」の項目は、中国が11%、日本が24%を示し、中国は日本に比べ、倍以上も低いことが、また逆に「疲れる」の項目では中国が13%、日本が6%となり、中国のほうが倍高いことがわかる。そして、女子は男子に比べ、面倒くささに対する意識の割合が両国ともに高いことがわかる。

また、これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国の女子間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間で異なる傾向にあることが証明された。

さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体を思いっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国の女子間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられなかった。

よって、大枠で検証をした場合、中学校体育実技に対する意識は両国ともに同様な傾向にあることがわかり、男女間では異なることがわかった。そして、マイナス志向の項目をみると女子は男子に比べ、面倒くささに対する意識の割合が両国ともに高いこともわかった。

(3) 高等学校について

高等学校の体育授業について中学校時と同様の観点からみる。結果は表1-3に示す通りである。

表 1-3-1. 体育実技授業に対する意識 (男女全体)

高等学校の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	102	29%	88	55%
体をおもいっきり動かせる	61	18%	36	23%
新しいこと・技術を学ぶ	51	15%	5	3%
面倒くさい	41	12%	13	8%
疲れる	67	20%	13	8%
その他	19	6%	4	3%
合 計	341	100%	159	100%

その結果、両国の「気分転換」の項目では、中国が 29%、日本が 55%を示し、日本と比較しその割合が 26%も低く、同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると中国が 18%、日本が 23%を示し、両項目間に割合差はあるものの、両項目ともに日本が中国の割合を上回っていることがわかる。そこでこの 2 項目について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられなかった。2.216 ($p > 0.05$)

よって、両国学生の高等学校体育実技に対する意識のうち「気分転換」と「体をおもいっきり動かせる」との関係については中学時と同様な傾向にあることが推察できる。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると中国が 15%、日本が 3%を示し、中国は日本と比べ、学びに対する意識が高い傾向にあることがわかる。「面倒くさい」の項目は、中国が 12%、日本が 8%を示し、「疲れる」の項目は、中国が 8%、日本が 3%と両項目ともに中国の割合が日本以上に高いことがわかる。そして、特に疲労感を感じる人数が日本と比べ多いこと、明らかに「面倒くさい」「疲れる」の割合は校種が上がるにつれ増加している傾向であることが特徴的と考えることができる。また、中国は日本に比べ「気分転換」の項目の割合が非常に低く、逆に「疲れる」の項目の割合が非常に高いことから、両国の高等学校時の体育授業の実施内容には何らかの要因の相違があるものと推察できる。

また、これらの 6 項目のうち「その他」を除いた 5 項目について両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体をおもいっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の 3 群に分類し、両国間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

そして、「気分転換」と「体をおもいっきり動かせる」との関係については、両国間で同様な傾向がみられたにも関わらず、このような傾向が示された要因として、学習志向項目やマイナス志向項目の相違が影響しているものと推察することができる。また、大卒で検証をした場合には、小・中学校時とは異なり、両国学生の高等学校体育実技に対する意識に違いがあることがわかった。

表 1-3-2. 体育実技授業に対する意識 (男子)

高等学校の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	49	27%	36	46%
体をおもいっきり動かせる	42	23%	22	29%
新しいこと・技術を学ぶ	35	20%	3	4%
面倒くさい	12	7%	7	9%
疲れる	36	20%	6	8%
その他	6	3%	3	4%
合 計	180	100%	77	100%

男子について比較した結果、両国間の「気分転換」の項目では、中国が 27%、日本が 46%を示し、

中国は日本に比べ、その割合が2割近くも低いことがわかる。同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると中国が23%、日本が29%を示し、両項目間に割合差はあるものの、両項目ともに日本が中国の割合を上回っていることがわかる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の男子間に有意な関連がみられなかった。0.995 ($p > 0.05$)

よって、両国学生の高等学校体育実技に対する意識のうち「気分転換」と「体をおもいっきり動かせる」との関係については男子の場合、中学校時と異なり同様な傾向にあることが推察できる。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると中国が20%、日本が4%を示し、中国は日本に比べ、5倍も高いことがわかる。「面倒くさい」の項目は、中国が7%、日本が9%を示し、近似した割合であることがわかる。「疲れる」の項目では中国が20%、日本が8%を示し、中国は日本と比較し、2倍以上も高いことがわかる。

よってここでは、「新しいこと・技術を学ぶ」と「疲れる」という項目に対する割合が中国は日本に比べ、非常に高いということが大きな特徴ということが出来る。

また、これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国の男子間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体を思いっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国男子間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。なお、「気分転換」と「体をおもいっきり動かせる」との関係については、両国間で同様な傾向がみられたにも関わらず、このような傾向が示された要因として、学習志向項目やマイナス志向項目の相違が影響しているものと推察できる。

表1-3-3. 体育実技授業に対する意識 (女子)

高等学校の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	53	33%	52	63%
体をおもいっきり動かせる	19	12%	14	17%
新しいこと・技術を学ぶ	16	10%	2	3%
面倒くさい	29	18%	6	7%
疲れる	31	19%	7	9%
その他	13	8%	1	1%
合 計	161	100%	82	100%

女子について比較した結果、両国間の「気分転換」項目では、中国が33%、日本が63%を示し、中国は日本と比べ、その値が30%も低く、同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると中国が12%、日本が17%を示し、中国は日本に比べ、若干低いことがわかる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられ、両国間で異なる傾向にあることが証明された。また、ここでは、「気分転換」という項目に対する割合が中国は日本に比べ、非常に低いということが大きな特徴といえる。そして、「気分転換」と「体をおもいっきり動かせる」との関係については男女間で異なる傾向にあることが推察できる。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると中国が10%、日本が3%を「面倒くさい」の項目は、中国が18%、日本が7%を「疲れる」の項目では、中国が19%、日本が9%を示し、3項目については、日本と比較し、中国が全て高い割合を示していることがわかる。

また、これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国の男子間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間で異なる傾向にあることが証明された。

さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体を思いっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間で異なる傾向にあることが証明された。

よって、大卒で検証をした場合、女子の場合は、高等学校体育実技に対する意識は、中学校時と異なることがわかる。

(4) 3校種間における体育実技授業に対する意識変化とその関連性について

表1-4-1. 3校種間における体育実技授業に対する意識 (男女全体)

	中 国						日 本					
	小学校		中学校		高等学校		小学校		中学校		高等学校	
気分転換	109	32%	84	25%	102	29%	25	16%	33	21%	88	55%
体をおもいっきり動かせる	92	27%	105	31%	61	18%	93	58%	61	37%	36	23%
新しいこと・技術を学ぶ	52	15%	66	19%	51	15%	18	11%	20	13%	5	3%
面倒くさい	19	6%	22	6%	41	12%	9	6%	28	18%	13	8%
疲れる	28	8%	40	12%	67	20%	5	3%	12	8%	13	8%
その他	41	12%	24	7%	19	6%	9	6%	5	3%	4	3%
合 計	341	100%	341	100%	341	100%	159	100%	159	100%	159	100%

小・中・高等学校の校種全体を概観すると、「気分転換」の場合、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：32%、中：25%、高：29%）が減少・増加の傾向がみられたのに対し、日本は校種が上がるにつれて明らかにその割合（小：16%、中：21%、高：55%）が増加し、小学校時に比べ高校時では3倍以上もの増加傾向がみられ、中国とは異なった傾向を示していることがわかる。そして、日本の高等学校時における割合が全体の過半数を上回った点がこの項目の大きな特徴といえ両国の高等学校時の体育授業の実施内容には明らかに異なった要因が存在し、その要因による影響がこのような結果を生み出しているものと推察できる。

次に「体をおもいっきり動かせる」についてみると、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：27%、中：31%、高：18%）が増加・減少示しているのに対し、日本は校種が上がるにつれて明らかにその割合（小：58%、中：37%、高：23%）が減少し、小学校時に比べ高校時では3割を超える減少傾向がみられ、両国間に明らかな違いがあることがわかる。そして、日本の小学校時における割合が全体の過半数を上回った点がこの項目の大きな特徴といえ、加齢に伴う活動欲求の変化が著しいことが推察できる。

次に「新しいこと・技術を学ぶ」についてみると、両国ともに増加、減少という傾向を示したものの、中国（小：15%、中：19%、高：15%）は、日本（小：11%、中：13%、高：3%）と比較し、日本の高等学校時の減少率が他の校種時に比べ極めて大きいことがわかる。

次に「面倒くさい」についてみると、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：6%、中：6%、高：12%）が停滞・増加を示したのに対し、日本は校種が上がるにつれてその割合（小：6%、中：18%、高：8%）増加・減少という傾向を示し、小学校時に比べ中学校時では3倍もの増加傾向がみられることが日本の特徴といえる。

次に「疲れる」についてみると、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：8%、中：12%、高：20%）が明らかに増加し、日本は校種が上がるにつれてその割合（小：3%、中：8%、高：8%）が増加・停滞を示している。ここで注目できる点は、中国の高校時の割合が、他の校種時に比べ高いという点である。

以上「気分転換」、「体をおもいっきり動かせる」、「新しいこと・技術を学ぶ」、「面倒くさい」、「疲れる」それぞれの項目について両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、「疲れる」の項目 1.242 ($p > 0.05$) に有意な関連がみられず同様な傾向にあることが証明されたが、その他の項目については、全て有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

さらに、「プラス志向群」5.658 ($p > 0.05$)、「学習志向群」6.212 ($p < 0.05$)、「マイナス志向群」7.311 ($p < 0.05$) について χ^2 検定を行った結果、「プラス志向群」には有意な関連がみられず、両国間で類似した傾向にあることが証明されたが、他の2群については、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

よって、このことから両国ともに学年が上がるにつれ、体育実技への取り組み方の意識が変化することがわかった。また、大括りにした3群のうちプラス志向群の括りでは両国間で類似した傾向がみられたものの詳細（「気分転換」「体をおもいっきり動かせる」「新しいこと・技術を学ぶ」「面倒くさい」）については、両国間で全く異なった傾向にあることがわかった。

表1-4-2. 3校種間における体育実技授業に対する意識 (男子)

	中 国						日 本					
	小学校		中学校		高等学校		小学校		中学校		高等学校	
気分転換	49	27%	41	23%	49	27%	13	17%	13	17%	36	46%
体をおもいっきり動かす	49	27%	59	33%	42	23%	45	59%	38	50%	22	29%
新しいこと・技術を学ぶ	33	18%	43	24%	35	20%	9	12%	8	10%	3	4%
面倒くさい	9	5%	4	2%	12	7%	5	6%	8	10%	7	9%
疲れる	16	9%	19	10%	36	20%	1	1%	7	9%	6	8%
その他	24	14%	14	8%	6	3%	4	5%	3	4%	3	4%
合 計	180	100%	180	100%	180	100%	77	100%	77	100%	77	100%

男子の小・中・高等学校の校種全体を概観すると、「気分転換」の場合、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：27%、中：23%、高：27%）が緩やかな減少・増加傾向を示しているのに対し、日本は校種が上がるにつれてその割合（小：17%、中：17%、高：46%）が停滞・増加という傾向を示し、高等学校時では小・中学校時に比べ30%近くもの増加傾向がみられ、中国とは異なった傾向を示していることがわかる。

次に「体を思いっきり動かせる」についてみると、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：27%、中：33%、高：23%）が増加・減少を示しているのに対し、日本は中国に比べ全校種ともにその割合（小：59%、中：50%、高：29%）が大きく、校種が上がるにつれて減少し、高等学校時では小学校時に比べ30%もの減少傾向がみられ、中国とは異なった傾向を示していることがわかる。

次に「新しいこと・技術を学ぶ」についてみると、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：18%、中：24%、高：20%）が増加・減少を示しているのに対し、日本は校種が上がるにつれてその割合（小：12%、中：10%、高：4%）が減少し、日本の高等学校時の減少割合が他の校種時に比べ極めて低い割合を示していることがわかる。次に「面倒くさい」についてみると、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：5%、中：2%、高：7%）が減少・増加を示したのに対し、日本は校種が上がるにつれてその割合（小：6%、中：10%、高：9%）が増加・停滞という傾向を示したことがわかる。

次に「疲れる」についてみると、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：9%、中：10%、高：20%）が停滞・増加を示し、高等学校時に2倍に増加したのに対し、日本は校種が上がるにつれてその割合（小：1%、中：9%、高：8%）が増加・停滞という傾向を示したことがわかる。

以上「気分転換」、「体を思いっきり動かせる」、「新しいこと・技術を学ぶ」、「面倒くさい」、「疲れる」それぞれの項目について両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、「気分転換」以外の項目全てにおいて「体を思いっきり動かせる：3.123 (p>0.05)」「新しいこと・技術を学ぶ：2.822 (p>0.05)」「面倒くさい：3.277 (p>0.05)」「疲れる：3.277 (p>0.01)」有意な関連がみられず、両国間では類似した傾向にあることが証明された。さらに、「プラス志向群」0.889 (p>0.05)、「学習志向群」2.822 (p>0.01)、「マイナス志向群」1.633 (p>0.05)について χ^2 検定を行った結果、有意な関連はみられず、両国間で類似した傾向にあることが証明された。よって、男子学生の場合、体育実技に対する意識のうち「気分転換」以外の全ての項目内容について同様な傾向を示したことから、両国男子学生の体育実技授業に対する意識はかなり類似しているものと推察できる。

表1-4-3. 3校種間における体育実技授業に対する意識 (女子)

	中 国						日 本					
	小学校		中学校		高等学校		小学校		中学校		高等学校	
気分転換	60	37%	43	27%	53	33%	12	15%	20	24%	52	63%
体をおもいっきり動かせる	43	27%	46	29%	19	12%	48	58%	23	28%	14	17%
新しいこと・技術を学ぶ	19	12%	23	14%	16	10%	9	11%	12	15%	2	3%
面倒くさい	10	6%	18	11%	29	18%	4	5%	20	24%	6	7%
疲れる	12	7%	21	13%	31	19%	4	5%	5	6%	7	9%
その他	17	11%	10	6%	13	8%	5	6%	2	3%	1	1%
合 計	161	100%	161	100%	161	100%	82	100%	82	100%	82	100%

女子の小・中・高等学校の校種全体を概観すると、「気分転換」の場合、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：37%、中：27%、高：33%）が減少・増加を示しているのに対し、日本は校種が上がるにつれてその割合（小：15%、中：24%、高：63%）が明らかに増加し、高等学校時は小学校時に比べ5割近くもの増加傾向がみられ、全体の過半数を上回る値を示し、中国とは異なった傾向を示していることがわかる。

次に「体を思いっきり動かせる」についてみると、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：27%、中：29%、高：12%）が増加・減少し、中学校時に比べ高等学校時ではその割合が半減しているのに対し、日本は校種が上がるにつれてその割合（小：58%、中：28%、高：17%）が明らかに減少し、小学校時では過半数を上回っていた値も高等学校時では40%以上もの減少傾向がみられ、中国とは異なった傾向を示したことがわかる。

次に「新しいこと・技術を学ぶ」についてみると、両国ともに校種が上がるにつれてその割合（【中国】小：12%、中：14%、高：10%）、（【日本】小：11%、中：15%、高：3%）が増加・減少を示しているが、特に日本の高等学校時の減少率が他の校種時に比べ極めて大きいことがわかる。

次に「面倒くさい」についてみると、中国は校種が上がるにつれてその割合（小：6%、中：24%、高：7%）が増加・減少し、小学校時から中学校時にかけて4倍の増加がみられたことが特徴といえる。これに対し、日本は校種が上がるにつれてその割合（小：5%、中：10%、高：9%）が増加・停滞を示していることがわかる。

次に「疲れる」についてみると、両国ともに校種が上がるにつれてその割合（中国：小：7%、中：13%、高：19%）、（日本：小：5%、中：6%、高：9%）が増加し、増加率は中国のほうが高いことがわかる。

以上「気分転換」、「体を思いっきり動かせる」、「新しいこと・技術を学ぶ」、「面倒くさい」、「疲れる」それぞれの項目について両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、「気分転換」、「体を思いっきり動かせる」、「面倒くさい」の項目に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向が、また、「新しいこと・技術を学ぶ：3.435（ $p > 0.01$ ）」、「疲れる：0.319（ $p > 0.05$ ）」の項目には有意な関連がみられず、両国間では類似した傾向にあることが証明されたことから、女子学生の場合、体育実技に対する意識のうち「新しいこと・技術を学ぶ」「疲れる」の項目内容について同様な傾向にあることがわかる。そして、女子学生の場合、男子学生に比べ、体育実技に対する各項目の意識が両国間で異なる傾向が強いということが明らかとなった。

さらに、「プラス志向群」、「学習志向群」、「マイナス志向群」について χ^2 検定を行った結果、「学習志向群：3.435（ $p > 0.05$ ）」には有意な関連がみられず、両国間で類似した傾向にあることが、また、他の2群については有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

(5) 大学について

大学の体育授業について他校種と同様の観点からみる。結果は表1-5に示す通りである。

表1-5-1. 体育実技授業に対する意識（男女全体）

大学の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	54	16%	30	19%
体をおもいっきり動かせる	61	18%	17	11%
新しいこと・技術を学ぶ	154	45%	87	54%
面倒くさい	31	9%	15	9%
疲れる	27	8%	9	6%
その他	14	4%	1	1%
合 計	341	100%	159	100%

その結果、両国間の「気分転換」の項目では、中国が16%、日本が19%を示し、日本と比較しその割合が若干高いことがわかる。同様に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると中国は18%、日本が11%を示し、気分転換とは逆に日本と比較し、その割合が7%高いことわかる。そこでこの2項目に

ついて χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連がみられなかった3.805 ($p > 0.01$)ことから、両国学生の授業に対する意識は類似した傾向にあることが推察できる。そして、2項目間の関係については高等学校時と同様な傾向にあることもわかった。次に「新しいこと・技術を学ぶ」についてみると中国が45%、日本が54%と他の項目に比べ両国ともに高い割合を示しており、学びに対する大切さを重く受け止め体育授業を受講していることがわかる。また、中国の割合が日本と比較し、9%低いことから日本の大学生は、中国の大学生以上に「自分にとって必要」という意識を持ち、積極的に「学ぶ」という意識を持った受講がなされていることが推察できる。「面倒くさい」の項目は、両国とも同様な割合を示し、「疲れる」の項目では中国は8%、日本は6%と中国が2%ほど高いことがわかった。

また、これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行なった結果、有意な関連はみられなかった。6.807 ($p > 0.05$)

よって、両国学生の大学体育実技に対する意識については同様な傾向にあることがわかる。

さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体を思いっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国間に差があるか χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられなかった。2.797 ($p > 0.05$)

以上のことから大学の体育授業に対する両大学生の意識については、全ての項目において有意な関連がみられず、両国間で類似した傾向にあることが証明されたことになる。

表1-5-2. 体育実技授業に対する意識 (男子)

大学の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	32	18%	15	19%
体をおもいっきり動かせる	41	23%	10	13%
新しいこと・技術を学ぶ	76	42%	38	50%
面倒くさい	9	5%	10	13%
疲れる	15	8%	4	5%
その他	7	4%	0	0%
合 計	180	100%	77	100%

男子について比較した結果、両国間の「気分転換」の項目では、中国が18%、日本が19%を示し、両国男子間に近似した割合を示していることがわかる。同様に「体を思いっきり動かせる」の項目をみると中国が23%、日本が13%を示し、日本と比較し10%高い。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なったが、両国の男子間に有意な関連がみられなかった。1.95 ($p > 0.05$)

よって、男子学生の場合は、大学体育実技に対する意識のうち「気分転換」と「体をおもいっきり動かせる」との関係については、高等学校時と同じく、両国ともに同様な傾向にあることがわかる。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」の項目についてみると、中国が42%、日本が50%と他の項目に比べ両国ともに高い割合を示していることがわかる。また、中国は日本に比べ、8%ほど低いことがわかる。「面倒くさい」の項目は、中国は5%、日本は13%となり、中国は5%ほど低いことがわかった。「疲れる」の項目では中国が8%、日本が5%を示した。

これらの6項目のうち「その他」を除いた5項目について両国の男子間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられなかった。8.464 ($p > 0.05$)

よって、男子学生の場合、大学体育実技に対する意識は、両国ともに同様な傾向にあることがわかる。

さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体を思いっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の3群に分類し、両国の男子間に差があるか χ^2 検定を行った結果、両国の男子間に有意な関連がみられなかった。2.281 ($p > 0.05$)

以上のことから大学の体育授業に対する両男子大学生の意識については、全ての項目において有意な関連がみられず、両国間で類似した傾向にあることが証明されたことになり、男子学生の場合、大学体育実技に対する意識は、両国ともに同様な傾向にあることが推察できる。

表 1-5-3. 体育実技授業に対する意識 (女子)

大学の授業に関して				
	中 国		日 本	
気分転換	22	14%	15	18%
体をおもいっきり動かせる	20	12%	7	9%
新しいこと・技術を学ぶ	78	49%	49	60%
面倒くさい	22	14%	5	6%
疲れる	12	7%	5	6%
その他	7	4%	1	1%
合 計	161	100%	82	100%

女子について比較した結果、両国間の「気分転換」の項目では、中国が 14%、日本が 18%となり、中国は日本に比べその割合が低いく、逆に「体をおもいっきり動かせる」の項目をみると中国が 12%、日本が 9%を示し高いことがわかる。そこでこの 2 項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられなかった。1.478 ($p > 0.05$) によって、女子学生も男子学生と同様、大学体育実技に対する意識のうち「気分転換」と「体をおもいっきり動かせる」との関係については、両国ともに同様な傾向にあることがわかる。

次に、「新しいこと・技術を学ぶ」についてみると、中国が 49%、日本が 60%となり、中国は日本より 11%ほど低いものの他の項目に比べ両国ともに高い割合を示していることがわかる。そして、学びに対する大切さを重く受け止め体育授業を受講していることがわかる。「面倒くさい」の項目は、中国が 14%、日本が 6%となり、中国は 8%ほど高いことがわかる。「疲れる」の項目では中国が 7%、日本が 6%と近似していることがわかる。

これらの 6 項目のうち「その他」を除いた 5 項目について両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、両国の女子間に有意な関連がみられなかった。5.661 ($p > 0.05$)

よって、男子学生の場合と同じく、大学体育実技に対する意識は、両国ともに同様な傾向にあることがわかる。さらに、これらの項目を①プラス志向群：「気分転換、体をおもいっきり動かせる」、②学習志向群：「新しいこと・技術を学ぶ」、③マイナス志向群：「面倒くさい、疲れる」の 3 群に分類し、両国間に差があるか χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連がみられなかった。1.75 ($p > 0.05$)

以上のことから大学の体育授業に対する女子大学生の意識については、全ての項目において有意な関連がみられず、両国間で類似した傾向にあることが証明されたことになり、男子学生の場合と同じく、大学体育実技に対する意識は、両国ともに同様な傾向にあることが推察できる。

2. 大学体育授業に対する教師としての意識について

(1) 指導意識の有無について

『体育の授業を受ける際、自分が今受講していることを将来教師になった時に自分が児童に教えるのだという意識はあるか?』という内容について、「とてもある」から「全くない」までの 6 段階から選択させた結果の表 2-1 に示した。

表 2-1-1. 体育実技授業に対する指導意識の有無について (男女全体)

指 導 意 識				
	中 国		日 本	
とてもある	63	18%	32	20%
ある	169	51%	66	42%
どちらかと言うとある	68	20%	34	21%
どちらかと言うとない	14	4%	17	11%
ない	22	6%	8	5%
全くない	5	1%	2	1%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目を意識ある群：「とてもある、ある、どちらかと言うとある」と意識ない群：「どちらかと言うとない、ない、全くない」の2群に大別した結果、中国は「意識ある群」が全体の89%、「意識ない群」が11%、日本は「意識ある群」が全体の83%、「意識ない群」が17%を示し、中国は日本に比べ「意識ある群」の割合が高いものの、両国間ともに同様な傾向にあることがわかる。

さらに、このことについて両国間に差があるか χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連がみられず、両国ともに同様な傾向にあることから0.201 ($p > 0.05$)、両国の学生ともに大学の体育授業に対する指導意識を持った受講意識は高く、教員を目指す者としての意識を持って受講に取り組んでいることが推察できる。

表2-1-2. 体育実技授業に対する指導意識の有無について (男子)

指 導 意 識				
	中 国		日 本	
とてもある	42	23%	18	23%
ある	94	52%	35	46%
どちらかと言うとある	18	10%	12	16%
どちらかと言うとない	8	5%	6	8%
ない	15	8%	5	6%
全くない	3	2%	1	1%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合は、中国は「意識ある群」が全体の85%、「意識ない群」が15%示しているのに対し、日本は「意識ある群」が全体の85%、「意識ない群」が15%を示し、両国ともに同様な傾向にあることがわかる。さらに、このことについて両国の男子間に差があるかを χ^2 検定によって検証を行った結果、有意な関連がみられず、両国の男子間では同一傾向にあることから0.056 ($p > 0.05$)、両国の男子学生ともに大学の体育授業に対する指導意識を持った受講意識は高く、教員を目指す者としての意識を持って受講に取り組んでいることが推察できる。

表2-1-3. 体育実技授業に対する指導意識の有無について (女子)

指 導 意 識				
	中 国		日 本	
とてもある	21	13%	14	17%
ある	75	47%	31	38%
どちらかと言うとある	50	31%	22	27%
どちらかと言うとない	6	4%	11	13%
ない	7	4%	3	4%
全くない	2	1%	1	1%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合は、中国は「ある群」が全体の91%、「ない群」が9%示しているのに対し、日本は「ある群」が全体の82%、「ない群」が18%を示し、中国は日本に比較し、「ある群」の割合が高いことがわかる。さらに、このことについて両国の女子間に差があるかを χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明されたが、数値をみる限りにおいては類似した傾向として捉えることができるように思われる。

(2) 受講内容の受けとめ方について

体育授業受講の際の現状について以下の3点について尋ねた。

その1『実際の学校現場で体育授業を行うための授業を受講していますか?』

その2『実際の学校現場で体育授業を行うための授業を受講したいですか?』

その3『大学で、実際の学校現場で体育授業を行うための授業は必要だと思いますか?』

表 2-2-1. 体育授業を行うための授業を受講しているかについて (男女全体)

受講の有無				
	中 国		日 本	
受けている	84	25%	82	51%
どちらかと言うと受けている	137	40%	39	25%
どちらとも言えない	38	11%	13	8%
どちらかと言うと受けていない	36	11%	6	4%
受けていない	46	13%	19	12%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目を受けている群：「受けている、どちらかと言うと受けている」と受けていない群：「どちらかと言うと受けていない、受けていない」の2群に大別した結果、中国は「受けている群」が全体の65%、「受けていない群」が24%を示し、日本は「受けている群」が全体の76%、「受けていない群」が16%を示した。このことから、中国は日本に比べ、「受けている群」の割合が11%低いことがわかる。このことについて両国間に差があるか χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

表 2-2-2. 体育授業を行うための授業を受講しているかについて (男子)

受講の有無				
	中 国		日 本	
受けている	62	35%	33	42%
どちらかと言うと受けている	72	40%	20	26%
どちらかとも言えない	15	8%	10	13%
どちらかと言うと受けていない	11	6%	2	3%
受けていない	20	11%	12	16%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合は、中国は「受けている群」が全体の75%、「受けていない群」が17%を示し、日本は「受けている群」が全体の68%、「受けていない群」が19%を示した。このことから、中国は日本に比べ、「受けている群」の割合が7%高いことがわかる。このことについて両国の男子間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられなかった。0.135 ($p > 0.05$)

よって、男子学生の場合、受講意識の有無については、両国ともに同様な傾向にあることが推察できる。

表 2-2-3. 体育授業を行うための授業を受講しているかについて (女子)

受講の有無				
	中 国		日 本	
受けている	22	14%	49	60%
どちらかと言うと受けている	65	40%	19	23%
どちらかとも言えない	23	14%	3	4%
どちらかと言うと受けていない	25	16%	4	5%
受けていない	26	16%	7	8%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合は、中国は「受けている群」が全体の54%、「受けていない群」が32%を示し、日本は「受けている群」が全体の83%、「受けていない群」が13%を示し、中国は日本に比べ、「受けている群」の割合が29%も低いことがわかり、両国の女子間に明らかに違いがあることがわかる。このことについて両国の女子間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明されたことから、女子学生は男子学生と異なり、受講意識の有無については、両国間で異なる傾向にあることが推察できる。

表 2-3-1. 体育授業を行うための授業を受講したいかについて (男女全体)

受講の意思				
	中 国		日 本	
とても受けたい	52	15%	43	27%
受けたい	135	39%	68	43%
どちらかと言うと受けたい	61	18%	29	18%
どちらかと言うと受けたくない	30	9%	7	4%
受けたくない	57	17%	8	5%
全くない	6	2%	4	3%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目を受けたい群：「とても受けたい、受けたい、どちらかと言うと受けたい、」と受けたくない群：「どちらかと言うと受けたくない、受けたくない、全くない」の2群に大別した結果、中国は「受けたい群」が全体の72%、「受けたくない群」が28%を示し、これに対し、日本は「受けたい群」が全体の88%、「受けたくない群」が12%を示し、中国は日本に比べ、「受けたい群」の割合が16%も低いことがわかる。このことについて両国間に差があるか χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることから、中国の大学生は、実際の学校現場で体育授業を行うための授業を日本の大学生ほど多く望んでいないことが推察される。

表 2-3-2. 体育授業を行うための授業を受講したいかについて (男子)

受講の意思				
	中 国		日 本	
とても受けたい	42	23%	21	27%
受けたい	82	46%	26	34%
どちらかと言うと受けたい	22	12%	15	20%
どちらかと言うと受けたくない	9	5%	4	5%
受けたくない	21	12%	7	9%
全くない	4	2%	4	5%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合は、中国は「受けたい群」が全体の81%、「受けたくない群」が19%を示し、日本と同じ割合を示し、同一傾向にあることがわかる。よって、男子大学生は、実際の学校現場で体育授業を行うための授業を日本の大学生と同様に望んでいる傾向にあることが推察される。

表 2-3-3. 体育授業を行うための授業を受講したいかについて (女子)

受講の意思				
	中 国		日 本	
とても受けたい	10	6%	22	27%
受けたい	53	33%	42	51%
どちらかと言うと受けたい	39	24%	14	17%
どちらかと言うと受けたくない	21	13%	3	4%
受けたくない	36	23%	1	1%
全くない	2	1%	0	0%
合計	161	100%	82	100%

女子の場合は、中国は「受けたい群」が全体の63%、「受けたくない群」が37%を示し、これに対し、日本は「受けたい群」が全体の95%、「受けたくない群」が5%となり、中国は日本と比べ、「受けたい群」の割合32%も低く、両国の女子間に大きな違いがあること、そして、特に日本学生の大半は、受講を望むことに対する意思が強いことが推察できる。また、両国の女子間に差があるか χ^2 検定を行った結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明され、女子学生は男子学生と異なり、受講の意思については、両国間で異なる傾向にあることがわかった。

表 2-4-1. 現場向け体育授業の必要性について (男女全体)

体育授業の必要性				
	中 国		日 本	
とても必要	63	18%	72	45%
必要	144	42%	64	40%
どちらかと言うと必要	50	15%	17	11%
どちらかと言うと必要でない	19	6%	1	1%
必要ない	59	17%	5	3%
全く必要ない	6	2%	0	0%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目を必要群：「とても必要、必要、どちらかと言うと必要」と必要ない群：「どちらかと言うと必要ない、必要ない、全く必要ない」の2群に大別した結果、中国は「必要群」が全体の75%、「必要ない群」が25%を示したのに対し、日本は「必要群」が全体の96%と非常に高い割合を示し、「必要ない群」が4%と中国は日本に比べ「必要群」の割合が21%も低く、両国間に大きな違いがあることがわかる。このことについて両国間に差があるか χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

表 2-4-2. 現場向け体育授業の必要性について (男子)

体育授業の必要性				
	中 国		日 本	
とても必要	51	28%	29	38%
必要	85	47%	33	43%
どちらかと言うと必要	18	10%	10	13%
どちらかと言うと必要でない	2	1%	0	0%
必要ない	21	12%	5	6%
全く必要ない	3	2%	0	0%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、中国は「必要群」が全体の85%、「必要ない群」が15%を、日本は「必要群」が全体の94%、「必要ない群」6%を示し、中国は日本に比べ「必要群」の割合が9%ほど低いものの同様な傾向を示していることがわかる。このことについて両国の男子間に差があるか χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられなかったことから3.214 ($p > 0.05$)、男子学生の場合、現場向け体育授業の必要性については、両国ともに同様な傾向にあることがわかる。

表 2-4-3. 現場向け体育授業の必要性について (女子)

体育授業の必要性				
	中 国		日 本	
とても必要	12	7%	43	52%
必要	59	37%	31	38%
どちらかと言うと必要	32	20%	7	9%
どちらかと言うと必要でない	17	10%	1	1%
必要ない	38	24%	0	0%
全く必要ない	3	2%	0	0%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合、中国は「必要群」が全体の64%、「必要ない群」が36%を示したのに対し、日本は「必要群」が全体の99%とほぼ全員がその必要性を感じており、両国間において大きな違いがみられるとともに「受講の意思」との深い関連性をみてとることができる。このことについて両国の女子間に差があるか χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

以上のことから、実際の学校現場で体育授業を行うための授業受講の有無について、「受けている群」

についてみると、中国は日本に比べ、その割合が11%低いことがわかり、 χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明されたこと。また、大学で、実際の学校現場で体育授業を行うための授業受講希望についてみると中国は日本に比べ、「受たい群」の割合が16%も低いことがわかり、 χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明されたこと。そして、現場向け体育授業の必要性についてみると中国：75%は、日本：96%に比べ「必要群」の割合が21%も低く、両国間に大きな差があり、 χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明されたこと。の3つの項目を総体的にみることで中国学生は、実際の学校現場で体育授業を行うための授業を日本学生ほど受けていないと感じているにも関わらず、受講したいとする意思については、日本に比べて低いこと、さらに、中国学生は、日本学生に比べ、現場向け体育授業の必要性に対する意識もかなり低いことが推察できる。

(3) 準備運動の必要性とその意識

『体育の授業で準備運動は必要だと思いますか?』という内容について「絶対に必要」から「必要ない」までの4段階から選択させた結果の内訳を表3に示した。

表3-1. 準備運動の必要性について (男女全体)

準備運動の必要性				
	中 国		日 本	
絶対に必要	145	43%	100	63%
ある程度必要	155	45%	58	36%
それほど必要ではない	34	10%	1	1%
全く必要ない	7	2%	0	0%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目を必要群：「絶対に必要、ある程度必要」と必要ない群：「それほど必要ではない、全く必要ない」の2群に大別した結果、中国は「必要群」が全体の88%、「必要ない群」が12%を示し、日本は「必要群」が全体の99%と非常に高い割合を示し、中国は日本と比較し、「必要群」の割合が11%ほど低いことがわかる。また、このことから日本学生の準備運動の必要性に対する意識の高さは、中国と比較し非常に高いことが特徴としてみることができる。そこでこのことを両国間について差があるか χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

そして、この結果から日本学生の体育授業の際の準備運動の必要性の高さが改めて明らかになった。

表3-2. 準備運動の必要性について (男子)

準備運動の必要性				
	中 国		日 本	
絶対に必要	100	55%	52	68%
ある程度必要	61	34%	24	31%
それほど必要ではない必要	16	9%	1	1%
全く必要ない	3	2%	0	0%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、中国は「必要群」が全体の89%、「必要ない群」が11%を示し、これに対し、日本は「必要群」が全体の99%、「必要ない群」が1%となり、中国は日本に比べ、「必要群」の割合が10%ほど低いことがわかる。このことを両国の男子間について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

女子(表3-3)の場合、中国は「必要群」が全体の86%、「必要ない群」が14%を示し、これに対し、日本は「必要群」が全体の100%となり、中国は日本に比べ、「必要群」の割合が14%ほど低いことがわかる。このことを両国の女子間について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

以上の結果から準備運動の必要性については、中国は「必要群」が全体の88%、「必要ない群」が

12%を示し、日本の99%と比べ11%も低く、日本の女子については不必要と回答した者がいなかったことを含め日本学生の準備運動の必要性に対する意識の高さは、中国と比較し非常に高いことが特徴としてみることができ、日本学生の体育授業の際の準備運動の必要性の高さが改めて明らかになったと言えるのではないだろうか。そして、このような結果が出た要因を考えるとすれば、日本の体育授業内容が中国と比べ多種目に渡り実施されていること。また、健康・安全面についての教育が細部に渡り浸透していること。等が起因しているものと推察できる。

表3-3. 準備運動の必要性について (女子)

準備運動の必要性				
	中 国		日 本	
絶対に必要	45	28%	48	59%
ある程度必要	94	58%	34	41%
それほど必要ではない	18	11%	0	0%
全く必要ない	4	3%	0	0%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合、中国は「必要群」が全体の86%、「必要ない群」が14%を示し、これに対し、日本は「必要群」が全体の100%となり、中国は日本に比べ、「必要群」の割合が14%ほど低いことがわかる。このことを両国の女子間について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

以上の結果から準備運動の必要性については、中国は「必要群」が全体の88%、「必要ない群」が12%を示し、日本の99%と比べ11%も低く、日本の女子については不必要と回答した者がいなかったことを含め日本学生の準備運動の必要性に対する意識の高さは、中国と比較し非常に高いことが特徴としてみることができ、日本学生の体育授業の際の準備運動の必要性の高さが改めて明らかになったと言えるのではないだろうか。そして、このような結果が出た要因を考えるとすれば、日本の体育授業内容が中国と比べ多種目に渡り実施されていること。また、健康・安全面についての教育が細部に渡り浸透していること。等が起因しているものと推察できる。

(4) 準備運動の実施可能性の有無について

準備運動の実施可能性の有無について『あなたはその時扱う主運動(指導すべき教材)に適した準備運動を行なうことができますか?』を尋ねた。なお、ここでの準備運動とは、ラジオ体操や通常の徒手体操だけでなく、その授業で行われる運動(主運動)の特性を考慮した予備運動も含めたものをいう。その内容について「できる」から「できない」の5項目から選択させた結果の内訳を表4に示した。

表4-1. 準備運動の実施可能性について (男女全体)

準備運動の実施可能性				
	中 国		日 本	
できる	78	23%	13	8%
ある程度できる	188	55%	58	37%
指導する教材(運動内容)による	37	11%	58	36%
できないと思う	15	4%	26	16%
できない	23	7%	4	3%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目をできる群:「できる、ある程度できる」、教材による群:「指導する教材(運動内容)による」、できない群:「できないと思う、できない」の3群に大別した結果、「できる群」についてみると中国が全体の78%、日本が全体の45%となり、中国では8割近い学生ができるとしているのに対し、日本は全体の半数にも満たないという大きな差がみられることがわかる。また、「教材による群」についてみると中国が11%、日本が36%となり、両国間で20%以上もの違いがみられ、できる群と逆な傾向を両国間で示していることがわかる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、有意

な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。なお、「できない群」については、中国が11%、日本が18%と日本の方が高い割合を示していた。

表4-2. 準備運動の実施可能性について (男子)

準備運動の実施可能性				
	中 国		日 本	
できる	57	32%	12	16%
ある程度できる	93	51%	32	41%
指導する教材(運動内容)による	12	7%	21	27%
できないと思う	3	2%	10	13%
できない	15	8%	2	3%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、「できる群」についてみると中国が全体の83%、日本が全体の57%となり、中国は日本に比べ、「できる群」の割合が26%ほど高いことがわかる。また、「教材による群」については、中国が7%、日本が27%となり、日本は中国に比べ「教材による群」の割合が20%ほど高いことがわかり、できる群と逆な傾向を示していることがわかる。また、このことから日本男子学生は、中国男子学生に比べ、運動内容により準備運動に対する得手不得手感を持っていることが推察できる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の男子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。なお、「できない群」については、中国が10%、日本が16%と日本の方が高い割合を示していた。

表4-3. 準備運動の実施可能性について (女子)

準備運動の実施可能性				
	中 国		日 本	
できる	21	13%	1	1%
ある程度できる	95	59%	26	32%
指導する教材(運動内容)による	25	16%	37	45%
できないと思う	12	7%	16	20%
できない	8	5%	2	2%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合、「できる群」についてみると中国が全体の72%、日本が全体の33%となり、中国は日本に比べ、「できる群」の割合が39%も高いのに対して、「教材による群」については、逆に中国が16%、日本が45%となり29%も低く、両国間で異なる傾向を示していることがわかる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。なお、「できない群」については、中国が12%、日本が22%となり、男子と同様に中国は日本に比べ、「できない群」の割合が低いことがわかった。

以上のことから、男女ともに中国は日本と比較し、「できる群」の割合が高いのに対し、「運動(教材)による群」についてみると中国が低く、両国間に大きな特徴差がみられた。そして、中国学生は、準備運動の可能性意識が高く、日本学生は、指導する教材によりその可能性が異なる傾向にあり、その傾向は男子以上に女子が強いということが明らかとなった。そして、このような結果が出た要因を考えるとすれば、日本の体育授業内容が中国と比べ多種目に渡り実施されていることが起因しているものと推察できる。

(5) 体育授業における示範の可能性について

学校体育では、教師が示範をすることで、運動の様子全体のイメージを児童が持ちやすくなること、また、教師自身も指導者として自信が持てることが挙げられる。そこで、体育授業における示範の可能性とその理由について調べることにした。表5は「できる」から「できない」の5項目から選択させた結果の内訳である。

表5-1. 示範について (男女全体)

示範について				
	中 国		日 本	
できる	96	28%	27	17%
ある程度できる	172	50%	57	36%
運動(教材)(運動内容)による	36	11%	55	35%
できないと思う	14	4%	18	11%
できない	23	7%	2	1%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目をできる群「できる、ある程度できる」と運動(教材)による群:「運動(教材)(運動内容)による」、できない群「できないと思う、できない」の3群に大別した結果、「できる群」についてみると中国が全体の78%、日本が全体の53%となり、中国は日本と比較し、「できる群」の割合が25%も高いのに対し、「運動(教材)による群」についてみると中国が11%、日本が35%を示し、日本と比較し、「運動(教材)による群」の割合が24%も低く、両国間に大きな特徴差がみられた。そして、この傾向は前述した「準備運動の実施可能性の有無について」の場合と同様な傾向を示していることがわかる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

なお、「できない群」については、中国が全体11%、日本が全体12%を示した。これらことから、中国の学生は日本の学生に比べ、示範をすることに対する可能性意識が高いということが推察できる。

表5-2. 示範について (男子)

示範について				
	中 国		日 本	
できる	65	36%	7	9%
ある程度できる	83	46%	37	48%
運動(教材)(運動内容)による	11	6%	16	21%
できないと思う	5	3%	15	19%
できない	16	9%	2	3%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、「できる群」についてみると中国が全体の82%、日本が全体の57%となり、中国は日本に比べ、「できる群」の割合が25%も高いのに対し、「運動(教材)による群」についてみると中国が6%、日本が21%を示し、逆に日本は中国に比べ、「運動(教材)による群」の割合が3倍以上も高く両国男子間で大きな特徴差がみられた。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の男子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

なお、「できない群」については、中国が12%、日本が22%となり、日本は10%ほど高いことがわかる。そして、この傾向は前述した「準備運動の実施可能性の有無について」の場合と同様な傾向を示していることがわかる。

表5-3. 示範について (女子)

示範について				
	中 国		日 本	
できる	31	19%	0	0%
ある程度できる	89	55%	20	24%
運動(教材)(運動内容)による	25	16%	39	48%
できないと思う	9	6%	23	28%
できない	7	4%	0	0%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合、「できる群」についてみると中国が全体の74%、日本が全体の24%となり、中国は日

本に比べ、「できる群」の割合が50%も高いのに対し、「運動（教材）による群」についてみると中国が16%、日本が48%を示し、中国は日本に比べ、「運動（教材）による群」の割合が3倍も低いことがわかる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

なお、「できない群」については、中国が10%、日本が28%を示し、男子以上に中国は日本に比べ、「できない群」の割合が低いことがわかる。そして、この傾向は前述した「準備運動の実施可能性の有無について」の場合と同様な傾向を示していることがわかる。

以上のことから、男女とも中国は日本と比較し、「できる群」の割合が高いのに対し、「運動（教材）による群」についてみると中国が低く、両国間に大きな特徴差がみられた。そして、中国学生は、示範の可能性意識が高く、日本学生は、指導する教材によりその可能性が異なる傾向にあり、その傾向は男子以上に女子が強いということが明らかとなった。

この傾向は、前述した「準備運動の実施可能性の有無について」の場合と同様な傾向を示していることから、準備運動との関連性は相互に深い関わりがあるものと推察できる。そして、このような結果が出た要因を考えるとすれば、準備運動と同様、日本の体育授業内容が中国と比べ多種目に渡り実施されていることが起因しているものと推察できる。

3. 児童の技能・技術の良し悪しに対する理解度について

実技指導において教師は、児童の技術・技能を高めるために、児童の動きの何が良くて何が悪いのかを理解していることあるいは理解できることが求められる。そのためには、運動の特性を理解し指導ポイントを把握しておかなければならない。そこで、児童の技能・技術の良し悪しの理解度について調べることにした。表6は技能・技術の良し悪しに対する理解度を「わかる」から「わからない」の4項目から選択させた結果の内訳である。

表6-1-1. 技能・技術の「良さ」に対する理解度について (男女全体)

良さに対する理解度について				
	中 国		日 本	
わかる	72	21%	3	2%
ある程度わかる	184	55%	95	59%
運動領域（運動内容）による	5	1%	22	14%
わからない	80	23%	39	25%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目をわかる群：「わかる、ある程度わかる」と運動領域による群：「運動領域（運動内容）による」、わからない群：「わからない」の3群に大別した結果、「わかる群」についてみると中国が全体の76%、日本が全体の61%を示し、中国は日本と比較し、「わかる群」の割合が15%も高いのに対し、「運動領域による群」についてみると中国が1%、日本が14%を示し、日本と比較し、その割合が13%も低い結果となり、両国間で逆な傾向を示すという特徴の違いがみられた。

そして、この2項目について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。なお、「わからない群」は、両国ともに近似した割合を示していることがわかった。

表6-1-2. 技能・技術の「良さ」に対する理解度について (男子)

良さに対する理解度について				
	中 国		日 本	
わかる	47	26%	3	4%
ある程度わかる	113	63%	47	61%
運動領域（運動内容）による	4	2%	7	9%
わからない	16	9%	20	26%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、「わかる群」についてみると中国が全体の89%と非常に高い割合を示しているのに対し、

日本は全体の 65%と、中国に比べ 24%も低い割合を示していることがわかる。また、「運動領域による群」についてみると中国が 2%、日本が 9%を示し、日本と比較し、その割合 7%も低い結果となり、両国男子間で逆な傾向を示していることがわかる。そこでこの 2 項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の男子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

そして、「わからない群」は、中国が 9%、日本が 26%となり、両国間で 17%の違いがあるとともに日本男子学生の「良さ」に対する理解力の無さ（欠落）が改めて明らかとなったといえる。

表 6-1-3. 技能・技術の「良さ」に対する理解度について (女子)

良さに対する理解度について				
	中 国		日 本	
わかる	25	16%	0	0%
ある程度わかる	71	43%	48	59%
運動領域（運動内容）による	1	1%	15	18%
わからない	64	40%	19	23%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合、「わかる群」についてみると両国とも全体の 59%という同一の割合を示し、男子とは異なる傾向を示している。また「運動領域による群」についてみると中国が 1%、日本が 18%を示し、日本と比較し、その割合が 17%も低い結果となり、両国の女子で異なった傾向にあることがわかった。そこでこの 2 項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

そして、「わからない群」は、中国が 40%、日本が 23%となり、中国は日本に比べ、その割合が 17%も高いことがわかる。よってこのことから中国の女子学生は、「わかる」と「わからない」のどちらかにはっきり分かれているのに対し、日本の学生は運動領域というものが影響し、中国とは異なった傾向として現れたと考えることができる。また、日本人学生の「わからない群」の割合をみると、男女ともに近似したものとなっていることから「運動領域による群」の両国の割合の差がこのような違いを生み出したものと推察することができる。

表 6-2-1. 技能・技術の「悪さ」に対する理解度について (男女全体)

悪さに対する理解度について				
	中 国		日 本	
わかる	57	17%	4	3%
ある程度わかる	179	53%	97	60%
運動領域（運動内容）による	5	1%	22	14%
わからない	100	29%	36	23%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目をわかる群：「わかる、ある程度わかる」と運動領域による群：「運動領域（運動内容）による」、わからない群：「わからない」の 3 群に大別した結果、「わかる群」についてみると中国が全体の 70%、日本が全体の 63%を示し、中国は日本と比較し、「わかる群」の割合が 7%ほど高く、「運動領域による群」についてみると「悪さ」の場合、中国が 1%、日本が 14%を示し、日本と比較し、その割合が 13%も低い結果となり、両群間に「良さ」の場合ほどの比率差はないものの、同様な傾向が特徴として表れている。

そして、この 2 項目について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。なお、「わからない群」については、中国が 29%、日本が 23%を示し、中国は日本に比べ、6%高いことがわかった。

最後に、技能・技術の良し悪しの双方がわかる群に着目し、両国学生の違いをみたところ、中国は、良い点が見えるが 76%、悪い点が見えるが 70%と 6%ほど悪い点が見える割合が低いのに対し、日本は、良い点が見えるが 61%、悪い点が見えるが 63%と 2%ほどであるが悪い点が見える割合が高い結果となり、両国間に違いがあることがわかった。しかし、このことを両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った

結果、両国間に有意な関連がみられず、0.44 ($p > 0.05$) 両国間では同様な傾向にあることが証明されたことから、両国の学生ともに「わかる群」については、良さを判断するための理解度と悪さを判断するための理解度との間には共通した傾向があるものと推察できる。

表6-2-2. 技能・技術の「悪さ」に対する理解度について (男子)

悪さに対する理解度について				
	中 国		日 本	
わかる	40	22%	3	4%
ある程度わかる	103	57%	49	64%
運動領域 (運動内容) による	3	2%	7	9%
わからない	34	19%	18	23%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、「わかる群」についてみると中国が全体の79%、日本が全体の68%を示し、中国は日本に比べ、「わかる群」の割合が11%ほど高く、「運動領域による群」についてみると「良さ」の場合と同率で中国が2%、日本が9%を示し、日本と比較し、その割合が7%低い結果となり、両群間に「良さ」の場合ほどの比率差はないものの、同様な傾向が特徴として表れている。

そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の男子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。なお、「わからない群」については、中国が19%、日本が23%を示し、中国は日本に比べ、その割合が低いことがわかる。

最後に、技能・技術のよし悪しがわかる群に着目し、両国学生の違いをみたところ、中国は、良い点がわかるが89%、悪い点が79%と10%ほど悪い点をわかる割合が低いのに対し、日本は、良い点がわかるが65%、悪い点が68%と3%ほどであるが悪い点をわかる割合が高い結果となり、両国間に違いがあることがわかった。しかし、このことを両国の男子間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、両国間に有意な関連がみられなかったことから0.438 ($p > 0.05$)、両国の男子学生ともに「わかる群」については良さを判断するための理解度と悪さを判断するための理解度との間には共通した傾向があるものと推察できる。

表6-2-3. 技能・技術の「悪さ」に対する理解度について (女子)

悪さに対する理解度について				
	中 国		日 本	
わかる	17	11%	1	1%
ある程度わかる	76	47%	48	59%
運動領域 (運動内容) による	2	1%	15	18%
わからない	66	41%	18	22%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合、「わかる群」についてみると中国が全体の58%、日本が全体の60%を示し、中国は日本に比べ、「わかる群」の割合が若干低く、「運動領域による」についてみると「良さ」の場合同率で中国が1%、日本が18%を示し、中国は日本に比べ、その割合が17%も低い結果となり、両群間に「良さ」の場合ほどの比率差はないものの、同様な傾向が特徴として表れている。

そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。なお、「わからない群」については、中国が41%、日本が22%を示し、中国は日本に比べ、「わからない群」の割合が2割近く高いことわかった。最後に、技能・技術のよし悪しがわかる群に着目し、両国学生の割合を比較したところ、その傾向が非常に類似していることがわかった。そこでこのことを両国の女子間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行った結果、両国間に有意な関連がみられなかったことから0.044 ($p > 0.05$)、男子学生と同様、「わかる群」については同様な傾向にあることが推察できる。

以上のことから、よし悪しに対する理解度について、双方ともにわかる群に着目し、両国学生の違いをみたところ、両国の学生ともに「わかる群」については同様な傾向にあることがわかった。そして、中国学生は日本学生に比べ、教育関連実習の経験が少ないことから児童に対する観察力も低く、各運動

ポイントをさほど理解できてないという本研究で立てた仮説は却下されたことになる。

4. 学生の指導意欲について

将来教師を志望する学校教育専攻の学生にとって、教育実習は必修であり、実習の経験を通して教育への意欲や考え方が変わってくることが多い。そこで、中・日両国学生の指導意欲にどの程度の差があるのかを調べることにした。表7は、児童に対する指導意欲を「とてもある」から「全くない」の6項目から選択させた結果の内訳である。

表7-1. 指導意欲について (男女全体)

指 導 意 欲				
	中 国		日 本	
とてもある	51	15%	22	14%
ある	167	49%	79	49%
どちらかと言うとある	65	19%	49	31%
どちらかと言うとない	21	6%	5	3%
ない	35	10%	3	2%
全くない	2	1%	1	1%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目をある群：「とてもある、ある、どちらかと言うとある」とない群：「どちらかと言うとない、ない、全くない」の2群に大別した結果、中国は「ある群」が全体の83%、「ない群」が17%を示し、これに対し、日本は「ある群」が全体の94%、「ない群」が6%を示し、中国は日本に比べ、「ない群」の割合が11%も高いことがわかった。そして、このことを両国間について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。また、得られた値や傾向から、日本の学生は、中国の学生以上に、指導意欲が高いということが推察できる。

表7-2. 指導意欲について (男子)

指 導 意 欲				
	中 国		日 本	
とてもある	34	19%	18	23%
ある	114	63%	37	48%
どちらかとも言うとある	18	10%	16	21%
どちらかと言うとない	2	1%	3	4%
ない	11	6%	2	3%
全くない	1	1%	1	1%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、中国は「ある群」が全体の92%、「ない群」が8%を示し、これに対し、日本は「ある群」が全体の92%、「ない群」が8%となり、両国ともに同様傾向示したことがわかる。そして、このことを両国の男子間について χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連がみられなかったことから0.077 ($p > 0.05$)、両国の男子学生は、同様な傾向にあり、共に指導意欲が高いことが推察できる。

女子(表7-3)の場合、中国は「ある群」が全体の72%、「ない群」が28%、これに対し、日本は「ある群」が97%と非常に高い割合を示し、「ない群」が3%となり、日本は中国に比べ、「ある群」の割合が2割以上も高いことがわかる。そして、このことを両国の女子間について χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。また、得られた値や傾向から、日本の女子学生は中国の女子学生に比べ、体育授業の指導意欲に対し、非常に高い意識を持っていることが推察できる。

表7-3. 指導意欲について (女子)

指 導 意 欲				
	中 国		日 本	
とてもある	17	11%	4	5%
ある	53	32%	42	52%
どちらかとも言とある	47	29%	33	40%
どちらかと言うとない	19	12%	2	2%
ない	24	15%	1	1%
全くない	1	1%	0	0%
合 計	161	100%	82	100%

5. 過去における体育授業の成功体験の有無について

両国の学生に、過去の体育授業を通して、出来るようになって嬉しかったことの有無について「ある」「ない」の2択から選択させた結果の内訳を表8に示した。

表8-1. 体育授業における成功体験の有無について (男女全体)

体育における成功体験の有無				
	中 国		日 本	
あ る	226	65%	127	80%
な い	115	34%	32	20%
合 計	341	100%	159	100%

中国は「ある群」が全体の65%、「ない群」が34%を示し、これに対し、日本は「ある群」が全体の80%、「ない群」20%を示し、中国は日本に比べ「ある群」の割合が15%低く過去の体育授業において達成感や成就感を日本ほど経験していないことがわかる。そこでこのことを両国間について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

表8-2. 体育授業における成功体験の有無について (男子)

体育における成功体験の有無				
	中 国		日 本	
あ る	126	70%	61	79%
な い	54	30%	16	21%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、中国は「ある群」が全体の70%、「ない群」が30%を示し、これに対し、日本は「ある群」が全体の79%、「ない群」が21%を示し、日本は中国に比べ、「ある群」の割合が高いことがわかる。しかし、このことを両国間について χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連がみられなかったことから2.314 ($p > 0.05$)、両国の男子学生は、同様な傾向にあることがわかる。

表8-3. 体育授業における成功体験の有無について (女子)

体育における成功体験の有無				
	中 国		日 本	
あ る	100	62%	66	80%
な い	61	38%	16	20%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合、中国は「ある群」が全体の62%、「ない群」が38%を示し、これに対し、日本は「ある群」が全体の80%、「ない群」が20%を示し、中国は日本に比べ、「ある群」の割合が18%も低いことがわかった。このことを両国の女子間について χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明され、両国の女子学生は、男子と異なり、違う傾向を示したことがわかった。

6. 学生の児童に対する気持ちの理解について

両国の学生に、児童の気持ちとして「体育の授業が、『待ち遠しくて、待ち遠しくて仕方がない。』という気持ち」がわかるか否か、またその逆に「体育の授業が、『嫌で、嫌でたまらない。』という気持ち」がわかるか否かについて「わかる」、「ある程度わかる」、「教材による」、「わからない」の4項目から選択させた結果の内訳が表9-1、表9-2である。

表9-1-1. 児童の「待ち遠しい気持ち」に対する理解 (男女全体)

児童の気持ち (待ち遠しい)				
	中 国		日 本	
わかる	103	30%	73	45%
ある程度わかる	176	51%	71	45%
教材による	2	1%	3	2%
わからない	60	18%	12	8%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目をわかる群：「わかる、ある程度わかる」と教材による群、わからない群の3群に大別した結果、中国は「わかる群」の割合が全体の81%、「わからない群」の割合が18%を示したのに対し、日本は「わかる群」が全体の90%、「わからない群」が8%と両国ともわかる群の割合は高いものの、中国は日本と比較し、9%ほど低いことわかった。このことから、日本人学生は体育を楽しみにしている児童の気持ちがわかる学生が中国に比べ多いことがいえる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明された。

また、教材による群の割合が両国ともに大変低いことから「待ち遠しい気持ち」と教材との関連性はないものと推測できるのではないだろうか。

表9-1-2. 児童の「待ち遠しい気持ち」に対する理解 (男子)

児童の気持ち (待ち遠しい)				
	中 国		日 本	
わかる	61	34%	35	46%
ある程度わかる	94	52%	35	45%
教材による	1	1%	1	1%
わからない	24	13%	6	8%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、中国は「わかる群」の割合が全体の87%、「わからない群」の割合が13%を示したのに対し、日本は「わかる群」が全体の91%、「わからない群」が8%を示し、両国ともわかる群の割合は高いものの、中国は日本と比較し、4%ほど低いことわかった。そして、この2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国男子間には有意な関連がみられなかったことから1.562 ($p > 0.05$)、両国ともに児童の待ち遠しい気持ちについては同様な傾向にあることがわかった。

表9-1-3. 児童の「待ち遠しい気持ち」に対する理解 (女子)

児童の気持ち (待ち遠しい)				
	中 国		日 本	
わかる	42	26%	38	47%
ある程度わかる	82	51%	36	44%
教材による	1	1%	2	2%
わからない	36	22%	6	7%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合、中国は「わかる群」の割合が全体の77%、「わからない群」が22%を示したのに対し、日本は「わかる群」の割合が全体の91%、「わからない群」が7%を示し、中国は日本に比べ、「わかる群」の割合が14%低いことわかる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子

間に有意な関連がみられ、両国間では異なる傾向にあることが証明されたことから男子の場合と異なり、日本の女子学生は、中国に比べ体育を楽しみにしている児童の気持ちがわかる学生が多いことがいえる。また、男子同様、教材による群の割合が両国ともに大変低いことがわかる。

表9-2-1. 児童の「嫌いな気持ち」に対する理解 (男女全体)

児童の気持ち (嫌い)				
	中 国		日 本	
わかる	129	38%	53	33%
ある程度わかる	172	50%	82	52%
教材による	2	1%	9	6%
わからない	38	11%	15	9%
合 計	341	100%	159	100%

これらの項目をわかる群：「わかる、ある程度わかる」と教材による群、わからない群の3群に大別した結果、中国は「わかる群」の割合が全体の88%、「わからない群」が11%を示したのに対し、日本は「わかる群」の割合が全体の85%、「わからない群」が9%を示し、中国は日本と比較し、「わかる群」の割合が両国とも近似した割合を示していることがわかる。そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連がみられず0.157 ($p > 0.05$)、両国の学生ともに同様な傾向にあることがわかった。

最後に、「待ち遠しい気持ち」と「嫌いな気持ち」がわかる群に着目し、両国学生の違いをみたところ、中国は「待ち遠しい気持ち」がわかるが81%、「嫌いな気持ち」が88%と7%ほど「嫌いな気持ち」をわかる割合が高いのに対し、日本は「待ち遠しい気持ち」がわかるが90%、「嫌いな気持ち」が85%と5%ほど「嫌いな気持ち」をわかる割合が低い結果となり、両国間に違いがあることがわかった。

しかし、このことを両国間で差があるか証明するために χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連はみられず0.928 ($p > 0.05$)、両国の学生ともにわかる群については同様な傾向にあることがわかった。

表9-2-2. 児童の「嫌いな気持ち」に対する理解 (男子)

児童の気持ち (嫌い)				
	中 国		日 本	
わかる	72	40%	19	25%
ある程度わかる	87	48%	43	56%
教材による	1	1%	4	5%
わからない	20	11%	11	14%
合 計	180	100%	77	100%

男子の場合、中国は「わかる群」の割合が全体の88%、「わからない群」が11%を示したのに対し、日本は「わかる群」の割合が全体の81%、「わからない群」が14%となり、中国は日本に比べ、「わかる群」の割合が若干高いことがわかった。

しかし、この2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の男子間に有意な関連がみられなかったことから0.729 ($p > 0.05$)、両国の男子学生ともに「嫌いな気持ち」に対する理解は、同様な傾向にあることがわかった。また、教材による群についてみると中国が1%、日本が5%を示し、中国は日本に比べ、低いことがわかる。

最後に、「待ち遠しい気持ち」と「嫌いな気持ち」がわかる群に着目し、両国学生の違いをみたところ、中国は「待ち遠しい気持ち」がわかるが87%、「嫌いな気持ち」が88%と1%ほど「嫌いな気持ち」をわかる割合が高いのに対し、日本は「待ち遠しい気持ち」がわかるが91%、「嫌いな気持ち」が81%と10%ほど「嫌いな気持ち」をわかる割合が低い結果となり、両国の男子間に違いがあることがわかった。しかし、ことを両国間で差があるかを証明するために χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連がみられなかったことから0.5 ($p > 0.05$)、両国の男子学生ともにわかる群については同様な傾向にあることがわかった。

表9-2-3. 児童の「嫌いな気持ち」に対する理解 (女子)

児童の気持ち (嫌い)				
	中 国		日 本	
わかる	57	35%	34	41%
ある程度わかる	85	53%	39	48%
教材による	1	1%	5	6%
わからない	18	11%	4	5%
合 計	161	100%	82	100%

女子の場合、中国は「わかる群」の割合が全体の88%、「わからない群」が11%を示したのに対し、日本は「わかる群」の割合が全体の89%、「わからない群」が5%を示し、「わかる群」の割合が両国とも近似した割合を示していることがわかる。

そこでこの2項目について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられなかった。2.263 ($p > 0.05$) によってこのことから両国の女子学生も男子と同じく同様な傾向にあることがわかった。また、「教材による群」についてみると中国が1%、日本が6%を示し、中国は日本に比べ、低いことがわかる。

最後に、「待ち遠しい気持ち」と「嫌いな気持ち」がわかる群に着目し、両国学生の違いをみたところ、中国は「待ち遠しい気持ち」がわかるが77%、「嫌いな気持ち」が88%と10%ほど「嫌いな気持ち」をわかる割合が高いのに対し、日本は「待ち遠しい気持ち」がわかるが91%、「嫌いな気持ち」が89%と2%ほど「嫌いな気持ち」をわかる割合が低い結果となり、両国間に違いがあることがわかった。しかし、このことを両国間について χ^2 検定を行なった結果、両国の女子間に有意な関連がみられなかった。0.526 ($p > 0.05$) によってこのことから両国の女子学生も男子と同じくわかる群については同様な傾向にあることがわかった。

以上のことから、両国の学生に、児童の気持ち理解を尋ねたところ、日本は体育を楽しみにしている児童の気持ちがわかる学生が中国に比べ多いことがわかった。そして、教材との関わりについては両国ともにその割合が大変低いことから教材との関連性は薄いということが推察される。

Ⅶ. まとめ

本研究は、教師を志望する中・日両国の大学生の現在の体育授業に関する体験や考え方を聞くことにより、体育授業の実態を把握し、両国間の体育授業を比較することで、どのような点が異なっているかを調査し、体育授業に関する意識の違いを以下のように明らかにすることができた。

1. 小学校時における体育授業に対する意識は、両国とも「気分転換」、「体を動かすこと（動かせること）」という点が上位にあるが、中国は「気分転換」、日本は「体を動かすこと（動かせること）」が最も高い割合を示し、両国間で異なる傾向にあること。また、両国ともに小学校時においては、体育授業で何かを学ぼうとする意識はさほど高くないことがわかった。
2. 中学校体育実技に対する意識のうち「気分転換」と「体をおもいきり動かせる」との関係については、両国ともに同様な傾向がみられ、小学校期とは異なり校種が変わることで変容すること。また、中国は校種が上がるにつれて面倒くささ以上に疲労感を感じる傾向が、日本は、疲労感以上に面倒くささに対する意識が高くなる傾向があり、両国間の意識の違いがわかった。
3. 高等学校時における体育実技に対する意識は、中国は日本に比べ「気分転換」の項目の割合が非常に低く、逆に「疲れる」の項目の割合が非常に高いことから、両国の高等学校時の体育授業の実施内容には何らかの要因の相違があること。また、「面倒くさい」、「疲れる」の両項目ともに中国の割合が日本を上回り、特に疲労感を感じる人数が日本と比べ多く、それらの項目の割合は校種が上がるにつれ増加する傾向にあることがわかった。
4. 小・中・高等学校の校種全体を概観すると、「気分転換」の場合、中国は校種が上がるにつれてその割合が減少・増加の傾向を、日本は校種が上がるにつれて明らかにその割合が増加し、小学校時に比べ高校時では3倍以上もの増加傾向がみられ、中国とは異なった傾向を示していること。そして、日本の高等学校時における割合が全体の過半数を上回った点がこの項目の大きな特徴といえ、

両国の高等学校時の体育授業の実施内容には明らかに異なった要因が存在し、その要因による影響がこのような結果を生み出していると推察することができた。

「新しいこと・技術を学ぶ」についてみると、両国ともに増加、減少という傾向を示したものの、日本の高等学校時の減少率が他の校種時に比べ極めて大きいことがわかった。

5. 大学時における体育実技に対する意識は、両国ともに「新しいこと・技術を学ぶ」が上位にあり、他の項目に比べ高い割合を示し、学びに対する大切さを重く受け止め体育授業を受講しているといえる。また、中国の割合が日本と比較し、低いことから日本の大学生は、中国の大学生以上に「自分にとって必要」という意識を持ち、積極的に「学ぶ」という意識を持った受講がなされていることがわかった。そして、全ての項目において有意な関連がみられず、両国間で類似した傾向にあることが証明され、両国の学生ともに大学の体育授業に対する指導意識を持った受講意識は高く、教員を目指す者としての意識を持って受講に取り組んでいることがわかった。

実際の学校現場で体育授業を行うための「授業受講の有無」、「授業受講希望」、「現場向け体育授業の必要性」の3つの項目を総体的にみると中国学生は、実際の学校現場で体育授業を行うための授業を日本学生ほど受けていないと感じているにも関わらず、受講したいとする意思については、日本に比べて低いこと、さらに、中国学生は、日本学生に比べ、現場向け体育授業の必要性に対する意識もかなり低いことがわかった。

6. 日本学生の準備運動の必要性に対する意識の高さは、中国と比較し非常に高く、日本学生の体育授業の際の準備運動の必要性の高さが改めて明らかになった。そして、このような結果が生まれた要因を考えるとすれば、日本の体育授業内容が中国と比べ多種目に渡り実施されていること。また、健康・安全面についての教育が細部に渡り浸透していること。等が起因しているものと推察できる。
7. 中国学生は、準備運動ならびに示範の可能性意識が高く、日本学生は、指導する教材によりその可能性が異なる傾向にあること。そして、その傾向は男子以上に女子が強く、このような結果が生まれた要因を考えるとすれば、日本の体育授業内容が中国と比べ多種目に渡り実施されていることが起因しているものと推察できる。
8. 技能・技術の良し悪しの双方がわかる群に着目し、両国学生の違いをみたところ、中国は、良い点が見られる割合が、悪い点が見られる割合より高いのに対し、日本は逆の傾向を示したが、検定を行った結果、両国間に有意な関連がみられず、両国の学生ともに「わかる群」については、良さを判断するための理解度と悪さを判断するための理解度との間には共通した傾向があることがわかった。そして、中国学生は日本学生に比べ、教育関連実習の経験が少ないことから児童に対する観察力も低く、各運動ポイントをさほど理解できていないという本研究で立てた仮説は却下された。
9. 指導意欲については、日本が中国の割合を上回り、両国間では異なる傾向にあることが証明され、日本の学生は、中国の学生以上に、指導意欲が高いという結果が得られた。
10. 過去における体育授業の成功体験の有無については、中国は日本に比べ「ある群」の割合が低く、過去の体育授業において達成感や成就感を日本ほど経験していないことがわかった。
11. 両国の学生に、児童の気持ち理解を尋ねたところ、日本は体育授業を楽しみにしている児童の気持ちが見られる学生が中国に比べ多いことがわかった。そして、教材との関わりについては両国ともにその割合が大変低いことから教材との関連性は薄いということがわかった。さらに、「待ち遠しい気持ち」と「嫌いな気持ち」の双方が見られる群に着目し、両国学生の違いをみたところ、中国は「待ち遠しい気持ち」が見られる以上に「嫌いな気持ち」が見られる割合が高いのに対し、日本は逆な傾向を示したことから、 χ^2 検定を行なった結果、両国間に有意な関連はみられず、両国の学生ともにわかる群については同様な傾向にあることがわかった。

最後に、本研究で立てた3つの仮説についての検証に関しては、仮説1の学校体育の位置づけの基盤が異なることから、体育授業の捉えかたが異なる点については、小中高等学校における傾向、大学での受講意識、現場向け体育授業ならびに準備運動に対する意識等を見ることにより、両国間で異なる傾向にあることから概ね証明できたといえる。

次に仮説2については、現在の中国体育教育の転換が、日本の体育授業のように反映されていないという点については今回の調査では、仮説を証明するまでには至らなかった。

仮説3については仮説とは異なり、中国学生は日本学生に比べ、教育関連実習の経験が少ないことから児童に対する観察力も低く、各運動ポイントをさほど理解できてないという仮説は、「準備運動ならびに示範の可能性」、「技能・技術の良し悪しに対する理解度」、「児童の気持ち」等の結果から却下されたといえる。結びに、今回の研究を通じて、体育授業の実態を把握し、両国間の体育授業に関する意識を様々な観点からみることで多くの類似点や相違点を改めて認識することができた。この研究によって得られた成果を今後何らかの形で母国の体育教育に生かせることができれば幸いである。

引用文献

- 1) 何 京玉 「中国における小学校教員研修制度の特質と課題」
－幼稚園園長研修に関する政策の検討を中心に－ 2007年10月 p88
- 2) 指導が不適切な教員に対する人事管理システムのガイドライン 「はじめに」－文部科学省HP
[http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/08022711/001,htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/08022711/001.htm) 2011年3月
- 3) 指導力不足教員等の人事管理に関する各都県・指定都県市教育委員会の取組状況について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/04/04050701/002,htm 2011年3月
- 4) 植屋 清見・孫大鵬「指導力不足指導教師」を生み出したくないと願う大学教育の指導の在り方
－本学における初等体育科教育（陸上運動）の授業の実践を例として－ 教育実践研究 2006年11月
- 5) 林陶 『体育科教育における「体力づくり」の位置づけに関する中日比較研究』
中国四国教育学会 教育学研究紀要 第45巻 第2部（1999年）、p357
- 6) 学習指導要領の変遷－財団法人日本学校体育研究連合会
(www.gakutairen.jp/kenshu/taikai_shidoyoryo.html) 2011年4月
- 7) 5)
- 8) 6)
- 9) 5)
- 10) 6)
- 11) 5)
- 12) 6)
- 13) 毛振明（1992）中国における体育の動向とカリキュラム研究、学校体育 4:20-21
- 14) 6)
- 15) 中華人民共和国教育部 2001年「体育（1-6学年）の課程標準・体育と健康（7-12学年）
課程標準（実験稿）北京師範大学出版社、p13
- 16) 「朝日新聞朝刊（2007）学力を伸ばす教育とは、2007年7月8日付14版3面
- 17) 松延 博 授業における準備運動のねらいとその効果 体育の科学 1974年6月号 p362
- 18) 松延 博 授業における準備運動のねらいとその効果 体育の科学 1974年6月号 p361

参考文献

- 1) 高橋健夫（1997）浦和の体育研究、中村敏雄編、戦後体育実践論第1巻民主体育の探究、創文企画
p p123-139
- 2) 溝口貞彦（1978）中国の教育、日中出版、p p88-91
- 3) 丹下保夫（1965）体育技術と運動文化、大修館書店
- 4) 罗映清（1984）学校体育、体育史料11、人民出版社、p p75-82
- 5) 竹田清彦ら編（1997）体育科教育学の探究、大修館書店、
- 6) 赵建英（2001）2000年全国学生体质健康调研结果公布、中国学校体育总第122期：4-5
- 7) 黒羽亮一（1993年）臨時教育審議会、奥田真丈・河野重男監修、現代学校教育大事典第6巻
きょうせい、p. 522

- 8) 毛振明 (1992) 中国における体育の動向とカリキュラム研究、学校体育 45 (1) : 37-39
- 9) 中華人民共和国教育部 (2001) 体育 (1-6 年級) 体育与健康 (7-12 年級) 課程標準 (实验稿)
北京示範大学出版社, p p 1-69
- 10) 現在日本における教育改革関連の変遷
ー学習指導要領の改訂過程を中心としてー
- 11) 諾日布期仁, 孙堅代、他 体育授業における「自己教育力」に関する基礎的研究
ー子どもの主体性を引き出すプロセス的アプローチの可能性ー 2009 年 10 月
- 12) 文部科学省 小学校指導要領解説 体育編 p 2~4

謝 辞

本論文の作成にあたって、ご多忙の中、丁寧かつ熱心なご指導をして頂きました清水紀人教授、諸先生方、本研究のアンケート調査にご協力してくださいました中国 C 示範大学学生ならびに H 大学教育学部学生の皆様に心から感謝申し上げます。